

門九
325
卷23

紀伊名所圖會後編卷之六

目錄

日高川并圖

山莊

岩内王子社

日高潮

春日社

紀道明神社

岩内莊

蟹田山

熊野櫛現社

石淵鄉

被戸

聖德王子社并圖

印南莊

正八幡宮

富王子祠

印南川

印南莊

壁崎

印南莊

上野王子祠

印南川

印南川

印南莊

壁崎

印南莊

上野王子祠

切目莊

切目五郎王子社
并全圖古圖
信西故事

大塔宮社

御所屋敷

切尾湊

真妻明神社

百王子塚

岩代原

川又觀音社

中山

結松井

中山王子祠

南部鄉

岩代井

名石井

岩代山

南部峠

中山王子祠

南部川

岩代尾上

名石井

櫻川

超立寺

千尋濱

瓜溪

千里濱

鹿島井

勝專寺

阿和物天明神

三名部浦

產物盆石

一宮權現社

天寶明神社

那木

產物海馬

光明寺

鹿嶋明神社

新八幡宮

異事
道祖神の事
祇園御靈宮

野邊氏城跡
轟の瀧
埴田梅林

○同高川 然て官道山田店名を浦と小江を浦枝々又田村へ渡一ねり江と又田渡
法船と修く小江を浦みては小入った右より枝流の淵会するより修て枝より
以海口より大和を源のほまで度せりサ里许とつても河をへ四千八里とすを有也
多々之候也

草根集

乃れかの同高川も細やかに水と群く紀源の旅人 正徹

口 道成寺移起云

同高川とつる門をわざり大舟坐てば便船みて渡アぬふ

あ渡一よつて船うるは者れ只今追てあざく一坐てば船不
まうんとまんじうん元貿るの勞るきわむりしけども
は傳ひつまご近けりものどくあく渡てとサケどもよ
お渡一やくまく渡其財衣絹絞り大毒丸とれては川と
渡マ小けりとお渡をばちりとやて是内小江アリれと同
記みとせ小ええと

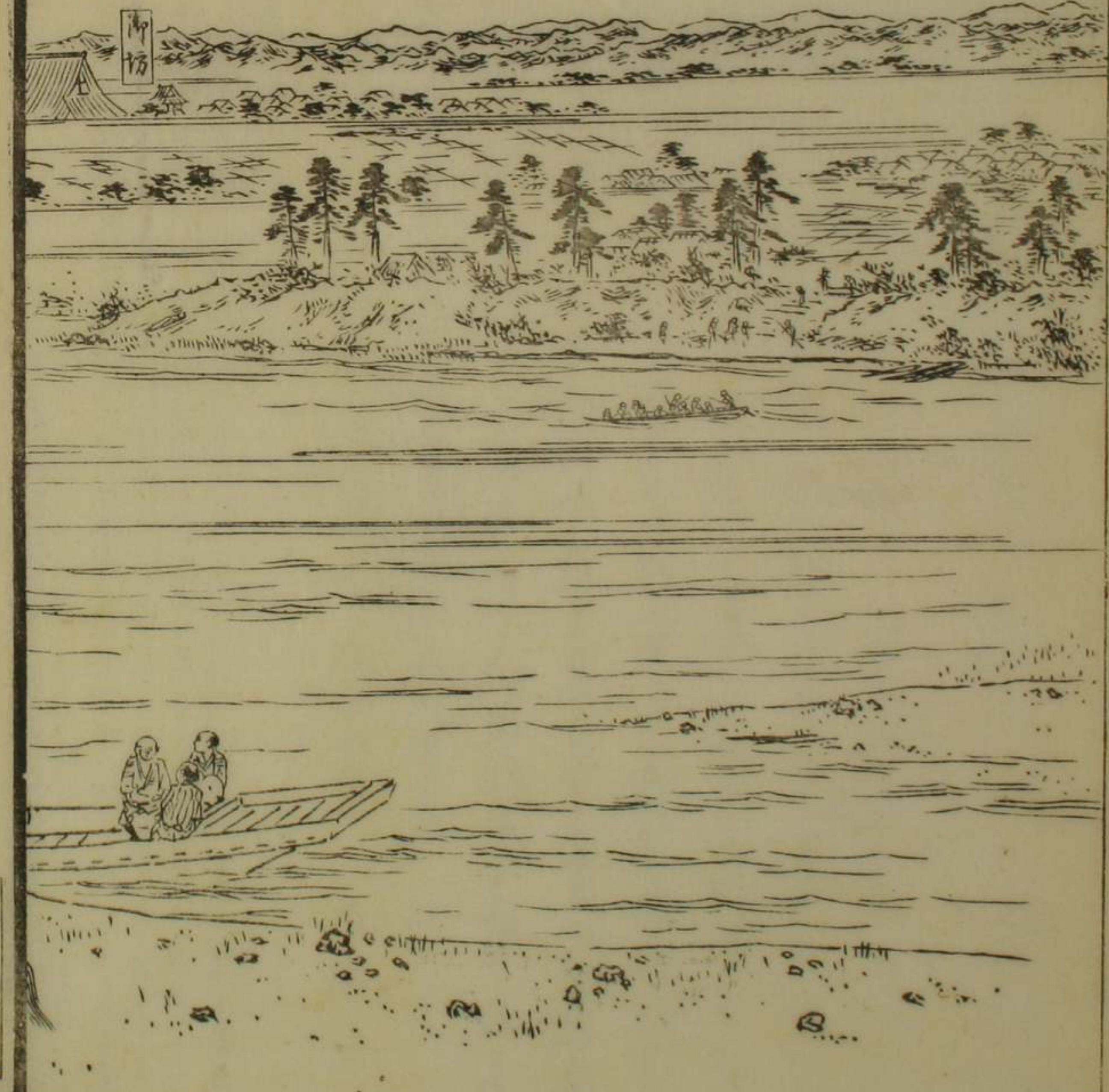
同高潮

秀美記小不くいわくわくもくもくもくもくもくもくもく
移け日書考院子游人烟名うそ一 陳時々武ノ移波湖又万葉集ノ枝乃湖

日高川 渡頭

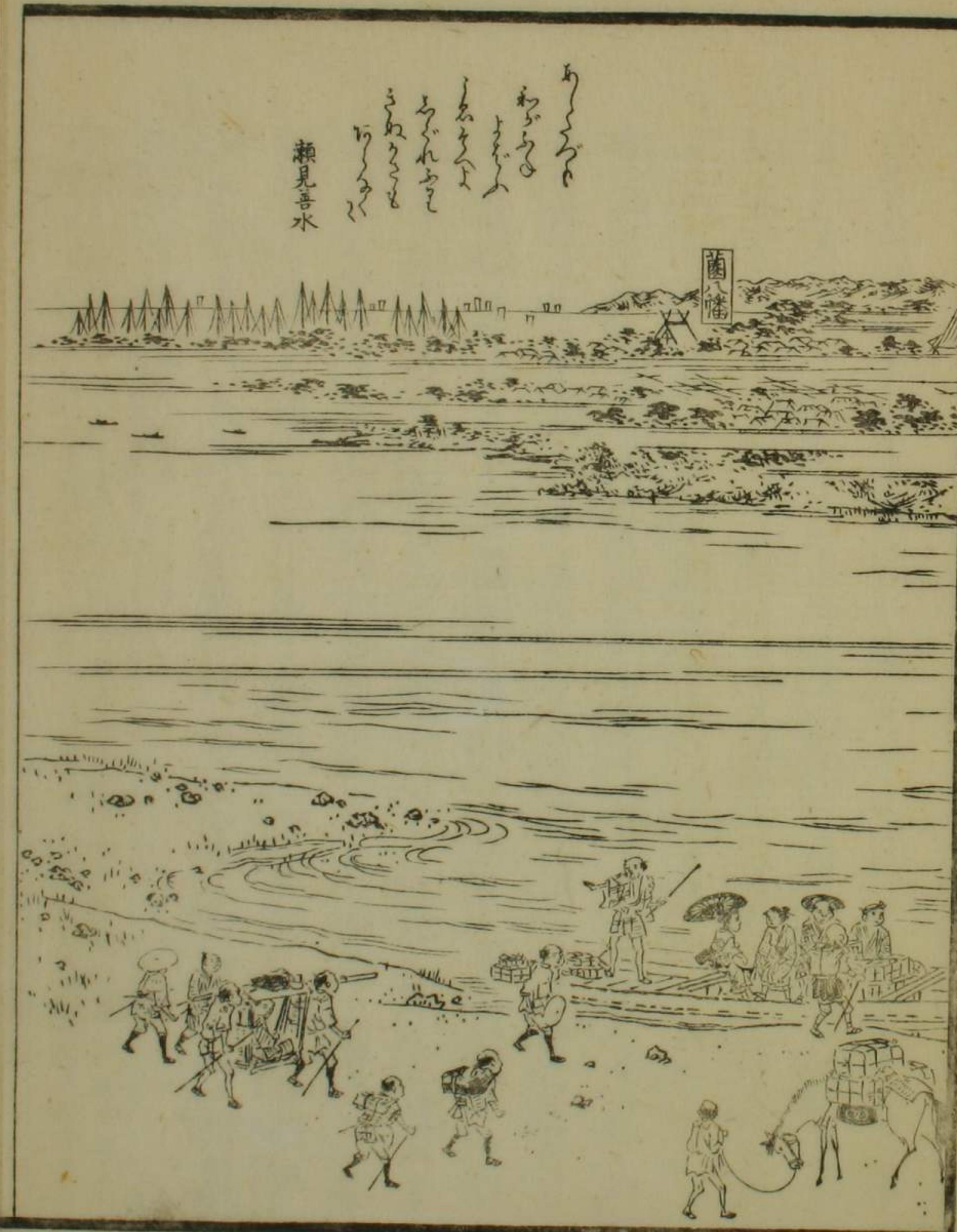
春水
秋水
秋の音
北風
水寄久道

宿人女
秋の音
一炉鳴
風鳥



頬見音水

菌藩



居名之湖足利做毛他湖の字等三十十と洲あり万を集注板小引る阿波風土記のや
湖具湖も亦同側うり又万を集小潮見明且石之潮潮葦又潮核延葛皆湖を注ぐ
て潮子作ア又字鏡集子潮キミツツ訓る
をもとふ中妻瀬モ用ひ

紀伊國日向郡の漁小紀多賀野臣とつゝ人内とけと細城
結びて魚を捕る事成業と頃同小安堵那今此主吉内郡
比人紀馬妻と海歌歌済中卿の人中臣連祖又麻呂と二
人万保新臣小傭アシタツ積と年便と又くるかひ人多良のと
うちれく二人をち行駁使まで網を引クビ魚抜らせけ
マサキ小室毛去年と月六日天幸に風ハリもたも
波もまづて湊カマヤより難波川よどて難波源出ハラハラくは人
うれ二人をきんしき流ハラハラ木をぬらすれべ二人も
いあ波ハラハラとて桜小編ハラハラとすにうちよつて姓人と欣
るれあ勢ハラハラもげハラハラとて包縛ハラハラ絞ハラハラと継
をとく海小入ハラハラとて漂流ハラハラとあと

二入を如何あらむせんとぞきく 唯南無、モモキテ羅刹絆絆せ
シムタヘ大迦年尼佛と稱へて夫^{トコ}叶^{ヒタチ}じて息^{ヒトコロ}アリ。諸
事やりてけし祖父麻呂^{ハシロ}ハ六日と經^{スル}淡路小南西因町^{シマニ}
浦北邊燒^{スル}人の怪不^シ小燈^{トヨウト}而馬^{アマ}走ち後^シ日小
同^シふくよ^シ泊^{スル}アテから^シと^シを繋^{スル}。其^ノ卿^ノ人^ヲこ
と^シ取^スと^シ其^ノ馬^ヲアヒ^スの状^ヲ知^ルて懲^メま^ハひて
為^ス團^ノ司^ヲ申^クれ^バ團^ノ司^ヲ也^シと^シ精^ミ研^メして^{シテ}くも
タ^シ主^ト附^ス祖父麻呂^{ハシロ}アヒ^ス。教生^トシ人^ヲ
擣^シて苦^シ變^スる^シ事^ヲ御^ス日^ニシ^テ不^可う^シ。彼^又駁^シ使^ス
も^シ教生^の業^ヲ止^メらん^シ。小角^トシテ其^ノ子^ノ團^ノ
令^シされ傳^シ小^シひき^シと馬^ヲ去^{ハシ}二月を經^ス。己^ヒ卿^ヲ不^可
ま^ハシ^シ。小妻子^ヲそれ^をス^シと^シ面^{ハシ}ま^{ハシ}。難^シモ^シ性^ト也^シ。

日と経て身に余りをすくけ坂道洗小早川ふ思ひが
けといひておもひをまよひあらじるゝに龜うとれもとづれくる
夫奥おもづれすと薄べんば妻子おもむくわむちび
くれそこととくれよし馬すま多ひ
せを秋ひよふ入法を附さればス人ゆく者
奇とせまねきよし鴻中ふてへ難多とつても多と食
い物をなまらむと室ふ天迦や車の威徳あて漂流
人の原法うり坂道もと風のや一況や後生の報とや

岩内社

日下川の南界より
さすにヶ村をすゞ

和名抄小出べ今齋
石濱町 和名抄小出べ今齋
南邊不墨内村河口と宗人ちの化
岩内村不らと今也久志波王子と

又此地河流多淺

齊辛記
十日略 渡河參一个八丙千王子

六

卷之二

平らにとゞ社傳はかく

や
や ごんぐのやう
や
熊野權現社 熊野村よりもあれ十月
や
ある日一村の衆ち詣る

右八十二社乃之之後至四社小合

紀伊國
社家の
傳承性

有德大君^{アシカ}萬^{ヤマ}小使^{ヤマニ}と云々あ社へ御立願ひて神因名十

卷之三

樂同神樂歌
寔如十年不復也
今之比音之謂
久矣

三

まゆめ、おまかせまくらとれやでのまむきこ

1

萬葉抄
卷之二
大嶺秋月

— 1 —

聖德王子社

はち子始て佛典
を尊崇

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

比
神
事
記

社と粉

卷之三



山のうえ、ゆるき大と小とよつて、夜、日れ御子ハ
日れしゆくをね、すくは、ゆくに常歎とく
て今そよぎすく

聖徳太子社トモロコ村には

山國店

岩内店の下流小川にて九ヶ村を経て元木と木のほり小日向川

絶道

神社川より小の流儀小川として名前浦小河は當社創立川と云ふ。二百間

村小屋一軒の小川の波の波のみ亦漂流して耳がふの松樹をうれる事

民不思波のものとす。於是時神と墨染め難い東園村の奈良天神の波下す。

以財よりも高社をして

式神トモロコアマツ

蟹田

天田十塚丘二村の下流小川にて所幸はまだ内玉子をねりてひを放て延喜王

蟹田

山子小河よりと流れひを氏蟹田山をさして、よろきりを古の慈悲修小川は日の冲海原の草えさんをさへあらわし古御の眺をアリ次ぐ。

熊野川

源ひ慈悲村をすすむかみ入田

○塩屋浦

二子川を濱てあ小二村小うち石井も源起小塩田の國を出アリて何去アリ

○塩屋王子祠

小塩屋不動にて王子川の傍小川にて人善人王子と云ふも善い

○塩屋王子祠

次境内不動不のをとす小川もは鳥羽院の御主ふの竹とアラ

○塩屋王子祠

塔主慈悲小河約一丈一丈一丈

十一日雨降申後聊休入夜月麗々也遲明出宿死

不知超山

参塩屋王子此邊又勝一地有被

千載集又統詞卷集

白河院をすすみてうよく作りてある小席供の人

新古今集

垣屋の子すみてうよく作りてある小席供の人

後一條内大臣

三統詞

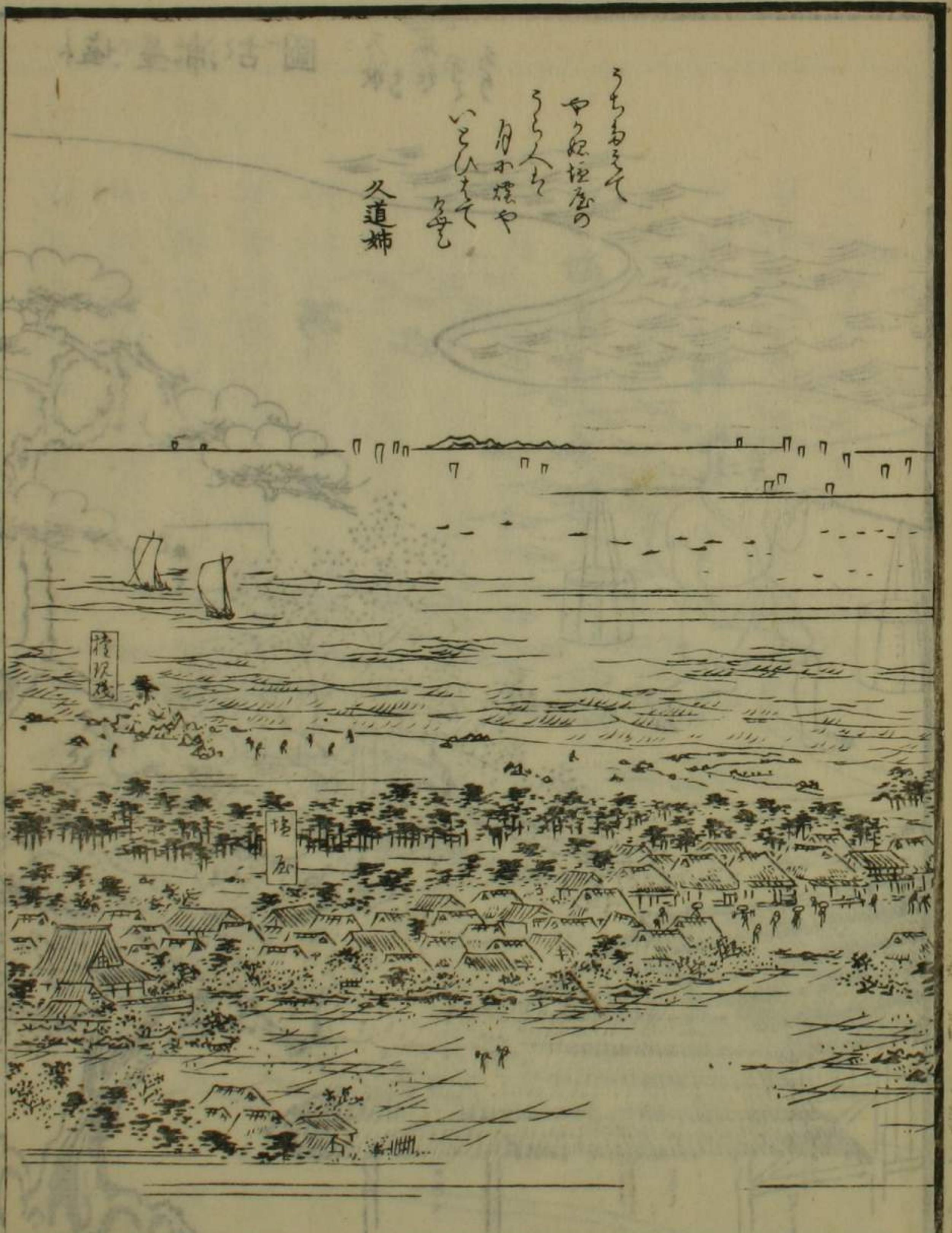
立見る垣屋の標浦をトモロコと神のゆくもり

德大寺左大臣

鹽屋王子祠前碑

仁井田好古

鹽屋村在日高川之海口昔時煮鹽爲業因名焉今村分南

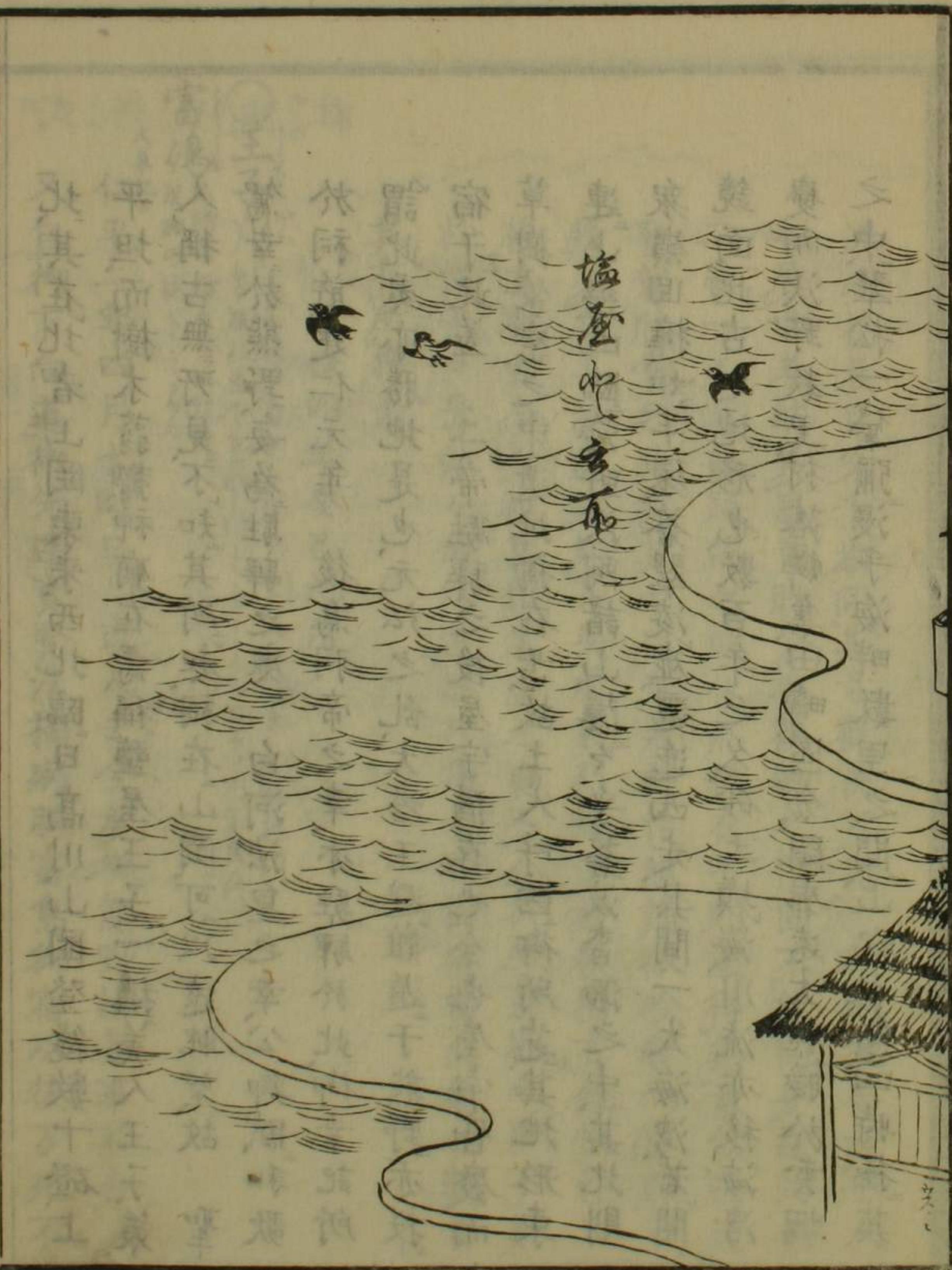


古屋浦塩圖

水起塩



多面屋臨



北其在北者山岡東來西北臨日高川山岡登纔數十磴上平坦而樹木蓊鬱神廟在焉稱鹽屋王子一稱美人王子羨人稱古無所見不知其所起祠在山岡可以遠眺望故聖駕幸於熊野每為駐驛之處白河法皇之幸公卿賦和歌於祠前建仁元年後鳥羽帝之幸亦駐驛於此御幸記所謂此處亦勝地是也元弘之亂大塔王避難遁于熊野亦投宿于此蓋二帝駐驛之後屋宇猶存也今也屋宇皆廢而草樹蒙密之中遺址獨在焉故土人呼曰御所芝其地形東連山巒西臨海畔淡阿諸山隱々乎蒼波杳渺之中其北則衆嶺回擁如半環蒼翠凌虛遷迤西走其間一大海湾若開鏡面此古之地形也數百年之久砂土填海川流亦移海湾變而沃野數里村落鱗集田疇區分閭廓遠大曠曠於雲烟之中翠松一黛彌漫乎海畔數里之間山容水態四時極其其有所擇焉

濃媚花晨月夕千歲同其奇觀誠可謂一郡絕境矣嗟乎人之居世老幼異思貴賤分趣觀物之情固不能同登茲岡也二帝一王游豫蹠躋之蹤依然猶存焉則豈得無意哉將追聖駕欣賞之跡縱其心目飛神怡朗誦微吟樂而忘歸耶將吊帝子於遺跡欽其英風氣烈流涕歎欷猶有餘慨邪又將達觀古今一視萬類衆滄之變不入於心悲觀之跡不繫於懷于々焉洋洋焉以遊思於物表耶樹碑勒文後之觀者其有所擇焉

天保四年癸巳九月

○王子川王子の川を小橋を架け川源を竹川よ

人車記云

畧

仁平二年四月十四日

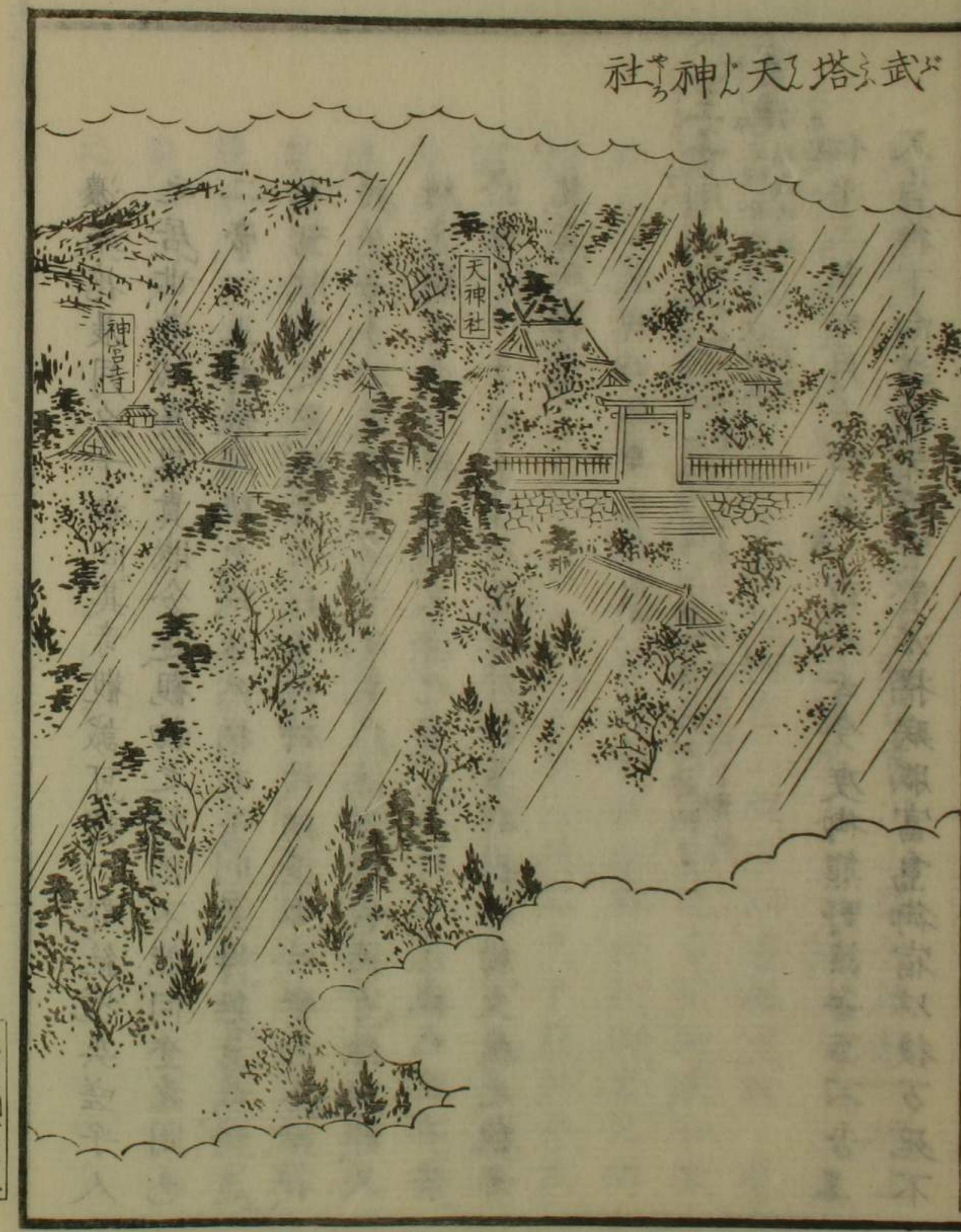
畧或人云今度御熊野詣每事不吉畧

又自御下向道御先達實賢法橋病腦富島御宿以後万死不

富鴻此指今名より後接況成の際下さる



紀四編六十一



武塔天神社

覺雖下一院一所不奉送謹應留途中了

權現磯 有坂春樹の
海藻をアメ

此地龜背洋より日の岬小笠山まで連山海面小模子
日向川の海口と尾崎と城左右木擁一難波中央木瀬
木瀬海波の裏既よりうるを北一株と桂木と桂沉
をとつひて是時神宮の祭とつひはく移入小達磨の文
書堂を寶御のにみを書して南へ其田龜石富鴻を源る
とあひ其田も今天田とも龜石の邊頃まで海口不
免れ形引る裏にアリ木太沙木塙没セリとつよ
龜石の名と知れたりとつども其田龜石木持セテ地木
木瀬木は破邊のすみのりんかくは破木うち難波を
木瀬木し候木と云々授あらも木時人車記ニスミ
木瀬富鴻拂寫木余は地の名ふやうとさ

鰐鳴 日浦尾崎より海上十二丁小町
產物中牡蠣より巴の湯屋多一三内内江をと捕ら弱小の牡蠣より承大不
武塔天神社 日村下河原セチケ村の表太林より祀る林素麿鳴尊とも天満宮ともへ
日大河原常を掛け林あふてこれを攝る式

上野

上野毛山田庵の南小川より
南流下す。南也考。上野毛山田井

瀬せ垣垣をも持津よれ名ふとの事。されど正治の御幸の時
切羽比身を小海邊晚眺うと頷ゆて渙火れ光すゝれ
煙うね瀬の垣垣の夕ぐれの景とあ達てれ綠一た色へえ
この瀬垣垣の海をうんうんと見るをよりは持
津よれ芦乃木の跡と云同名矣ふゝゝとされ御幸
の頃も垣垣の煙立の不つゝれば深火がたれ夕暮乃

京えさうそと同小源より吹きみては海つれぬ
ほれ毎日れ御清壁風清をもて待くとく破
の川を渡ねよ清風のまひ人の死ふ彈きまくら
うをうきし

○被戸　まのじもひの戸　被の舟とよもの形をうりあれア
○清姫草履塚　めいひのくさりづか　被戸の細中みのりアは姫の草履塚とよ標ア



小ち天正年中和泉淡輪村松家一堂海城小名手にひいてアマノ
セレモニアルのれをあらば周くよむう一弦不乃修験者、慈聖小僧等
の傍く多くあることわがて藏り人を
哥令不もモタヌケルベト小哉

番藏人尽歌合

この日はやがて
そよごひの家筋
ゆでひこ乃ねふ
ゆんまくや。

○ 翼川橋 後戸のあす川下架に人或
壁崎 翼川の南端より海上に突出て尾崎小對せりひし一塊の
鬼石アリテ頂ノ上に斜方隠然として屏風と云ふんが也
野嶋 桜戸の東十町を駆けめぐる本村といひ万葉集一卷ふそくれわらばはせばや
も寄下に載て後勘とすれ成候ゆき深沙の年海よりとへと塊ともぐも

河古根の席 今洋うびひ故もふは海迎をつゝま。せれと深うり比き
如る事も多く又そのたゞも其處と同ふとさきくそん

吾欲之野島波見世追底深伎阿古根能浦乃珠曾不拾

夫木抄

千五百番哥合

よ

汝小波之廟後とてスアシテモハ御所うけつひの浦のるも絶一季能

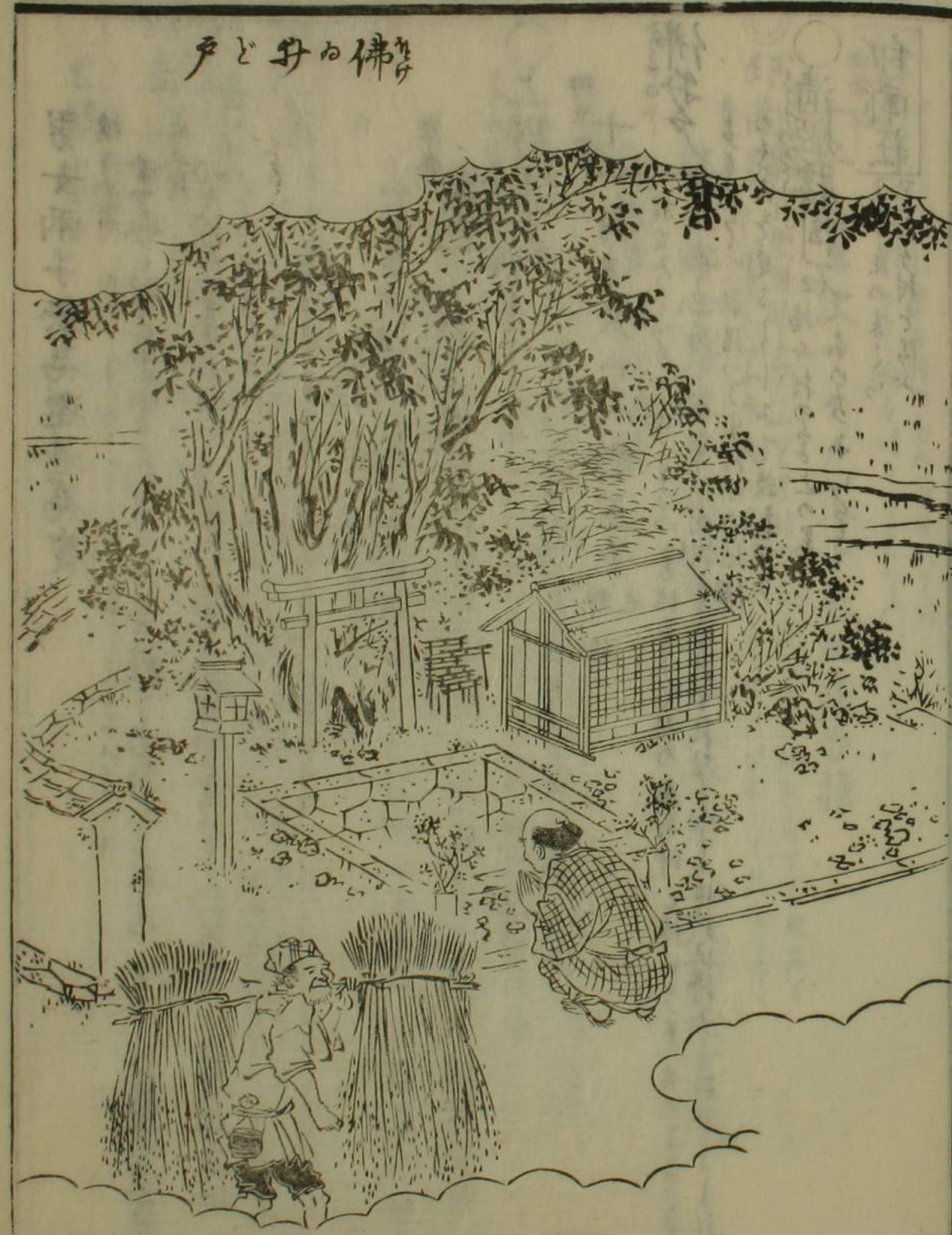
釋阿

古錢
天保六年三月於竹村の利勿とひ者田地よりとを積入百八十文と
元通寶の外三十株の錢文とれ家のせの年もうされば建治弘安北源
べり又立田殿又系北畠村廣利様ちれ度地不て大觀通寶數百文を
手化小もわく古沙と呼了車らくんいううれかくもかざら
祭文云孝子等捧隨分錢財奉乞一束余墓所とづみを引くり地神祭文弘法大
師の作たりとづみ地神小沙と捧て奉ふ沙乞りやへたうれ風作すとそとせり
これるゝ下又同書小尊鄉贊筆を引て云陝西慶陽府東山有古墓忽崩裂中有
石室石床堆古錢數處散布四角總計九百九十九故土人云以之辟邪最妙すと崇
川恐聞錄小古棺をわざと開く小棺の添文不用價錢九千九百九十一貫文買地一所とい
ふをも引くり又癸辛雜識別集小今人造墓必用買地券以梓木為之朱書云錢
九万九千九百九十九文買地某地うむれ法書と引用へり又云人年下也ぶ芳が號
於石見野村七光ちの境内山の傍松くれふと古沙九百九十一文乃古漢字と
かり出へりうを考へて後面の法款中小當塗王經一字三礼一品一錢千部乃文
ひに當塗王經を普門品うり一品一錢とひる古沙くもと古沙わざく千於乃數
を表ぜるあやと傳畫玉が日説艸小文くもと引出くもとひ地と
墓ふくろぐくもくを是多乃ふ以ひもて埋められ城をうべ

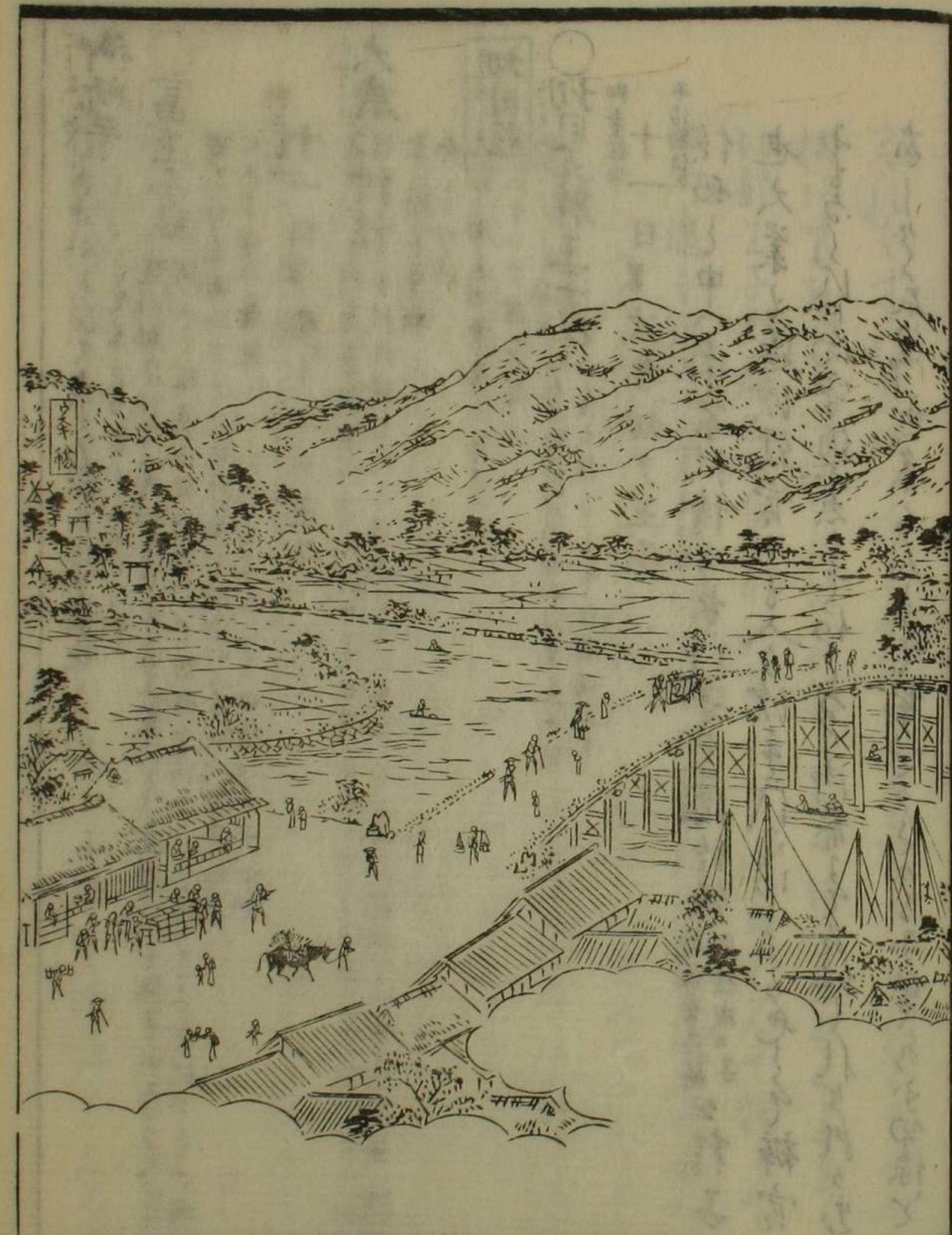
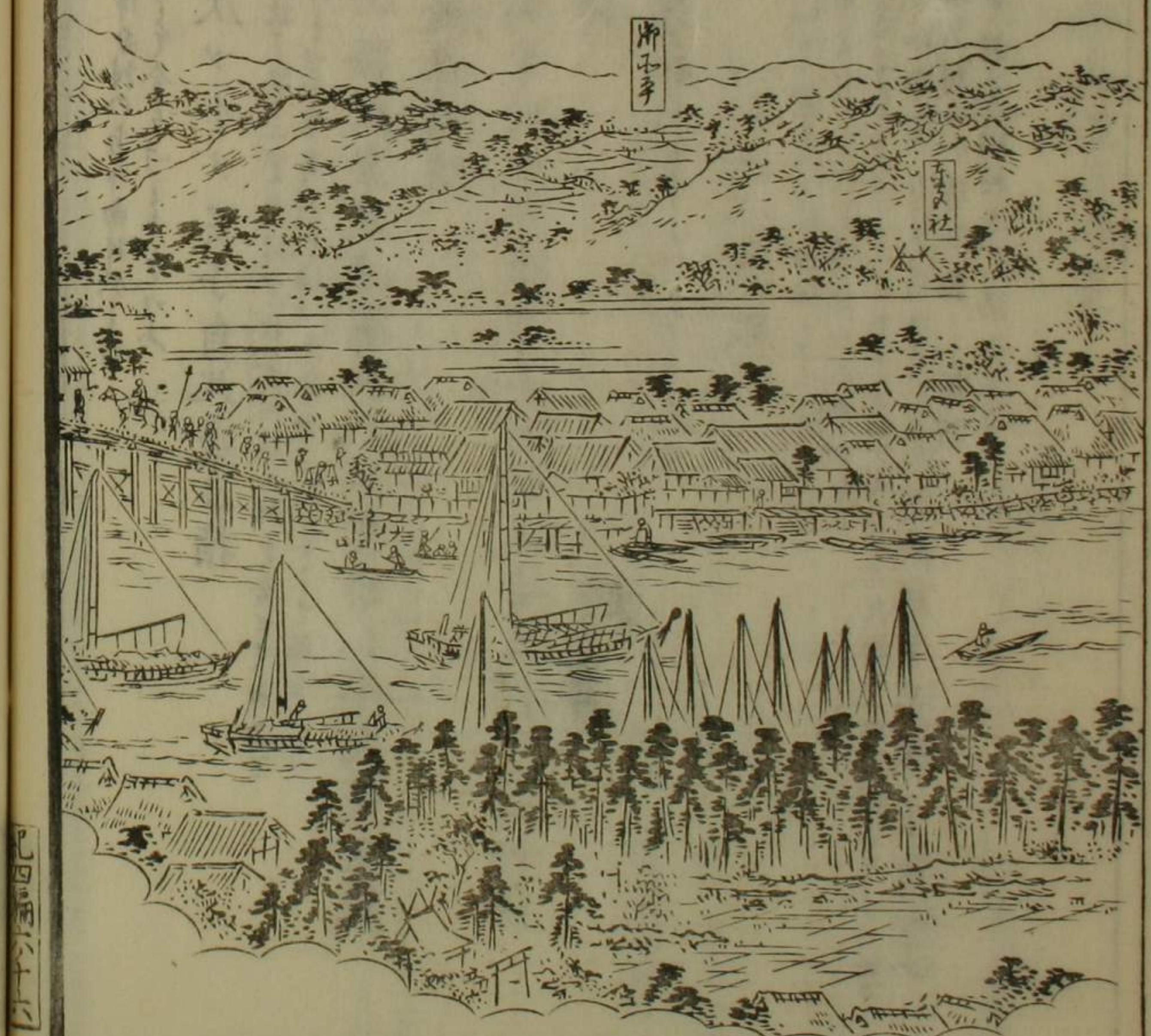
○上野

長秋記

大治五年十二月十八日上野御宿右衛門督宿所焼亡云



印南驛
木橋邊
の圖



御所平

（御所平）海津小をひて石とて西からては北

○富王子社

（富王子社）光川村小河原光川王子とよつて光川もいづれ川を流すれりと

（御幸記云）印南敷居地と云ふ地印南しつらへるが川王子河原

（又太子堂の廢地とつひ侍ふるふらう由徳行アサヤ

十一日畧 参イカル 王子

大歳神社

（大歳神社）印南原村小河原一村の產太朴タマムツアラ大夫とつ

（御幸記云）年朴大市始

今とつ

切同莊

（切同莊）印南庄の東南小河原

二十一ヶ村を経べ

○切同五躰王子社

（切同五躰王子社）切同西殿地村の西小河原入ヶ村

（御幸記云）五躰王子社被御札

十一日畧 次参切ア王子

（平治物語云）

佐西と申ハ南家也博士長門守と階後後

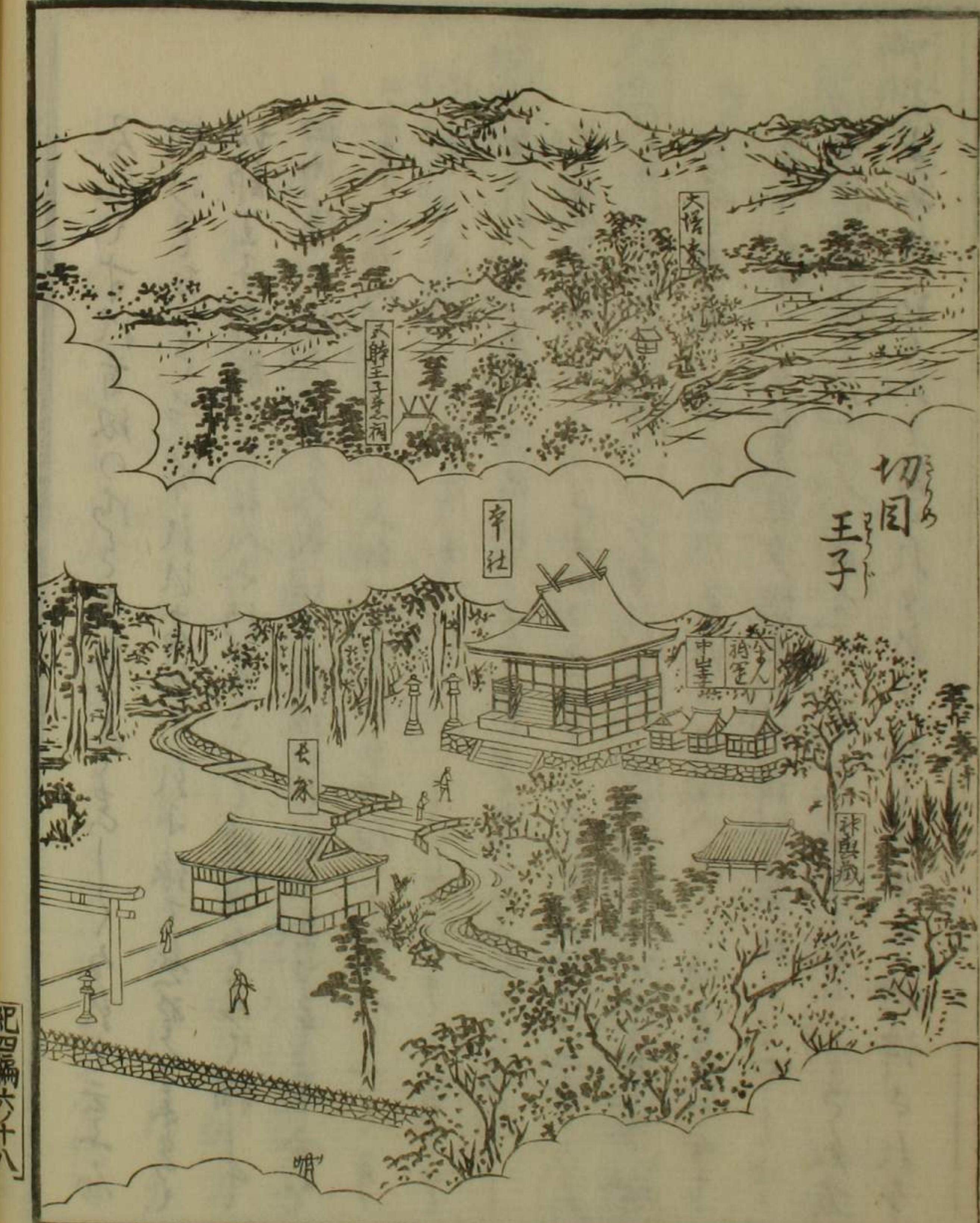
（經後當作經が子）

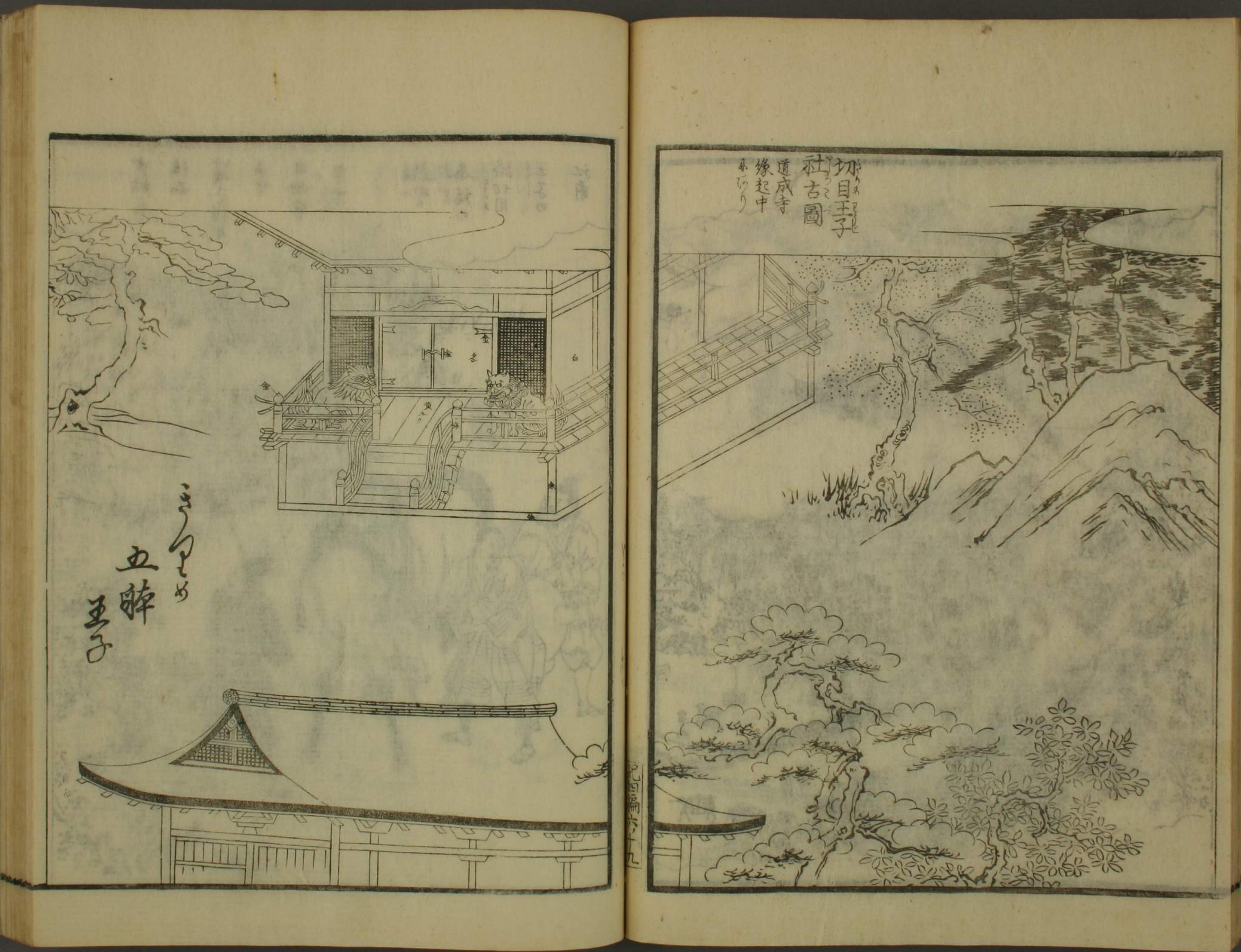
也大業も遂次舊官小も入らば重代小河原也て辨官

（ゆき）日向守通憲とて仰く御前とて召往されられ出

（あーク）風ハ拂面（まん）とて葉とくさる小枝あれ面像と

（それ）をすれ首汲の内と不無アとてお／＼おれと云ふ面
相手とぞとぞひきれに高祖あれ少儀て無禮と某々と
切部王子御前とてお人少行きとて通憲をとて相つて
曰御邊を従ひの才人哉但す首汲の主と不無アとて高命と
事とおれとつおれあれもとおれとつて一と可
おークれが行まとおれとて歎き多がそれをへやと
て道ふをとよおへざ出家とてや道とんぶん
それも七旬小株うぶめりんとぞひよまてこせ下向
とて御前へ奉出家の志候が日向入ると候とんへ下
（も）とて（も）見候少納毛と御許と蒙候わざと申
えれハ少納毛一人も麻毛とて左右をとどモトとね友
也やうりんと仰られを極く小申て御許されを







蒙つて應て出あつて少納入乃伝西と云々

然形道間王子祠（わらわの祠）りまくらとつとも當社古より
こそ其名もくづえりと神々入体玉子と稱
或り後大あえ人（ひと）傳（ゆきし）古之社殿も壯麗（さうれい）りて小天正の名號
ふ羅（ラ）アテ神室（カミムロ）も燒そ一其後或比丘（ヒク）をありて再興次
とつ又寛文二年官より御戸帳馬牛絃馬等とあて給
ひ神殿は修飾（しゅせき）をもかへり又柳の木と楓の木と城境
内小樹（シモツ）を移して今小第（シモヂ）えりて當社小柳れまと植
させりひへと古よりも然形宿（スルカニ）小の志高社の柳れまと
がくへともれ例の廢（ひき）と興（おき）とへる意（おもて）と
概然也宿（スルカニ）小柳の木を捕（つか）とすれど山城園の稻荷宿（スルカニ）
松代家（マツダケ）とかく額の古例ありて神多の祀（まつ）てありある
子かふひ家城以（シ）神符と改とつて其姓を考ふ

南海集
蓬萊之山海中峙六鼈長員潮壁趾王府銀臺知多少五雲
玲瓏金霞紫切目神殿第幾宮不老貝闕何歲起貝闕窮窪
屹雙桓碧磴青蘿水蔥寒（水蔥樹名）在熊峯療渴梅泉天淵漿萬古
宝燈金鸞丹南山往々金丹穴傳是羣仙所窟盤紺穹銀月
秋如水芝蓋飈輪駕六鷹帝子降來山之阿風颶々今珮珊

寄題切目王子宮

祇源瑜

珊、鼉鼓雲璈神方樂、玉醴蕙肴藉芳蘭、憶昔元弘草昧年、豺虎螭蟠鯨貌羣、王家南狩烟塵杳、誰知神光照九乾、宮前夢回太白高、龍飛日月錦旌懸、上皇亦曾駐仙蹕、羽從森々星冕芾、宸筵歌奏鳳來聽、咨嗟天南富、風物天南風物天下奇、濟勝探討究者誰、孫綽天台空有賦、馬遷禹穴跡難追、欲問仙宮吾老矣、極目雲海波一鴟、

那木

ひ木漢名竹系物とす。古の喜小柳の字を用ひ。那木の二合の字より又拂とちり拂の字音を將用ひ。又拂の字をも濫用。

保元物語

久壽二年ノ冬法皇熊野御参詣并御詫宣の條上略日ゴロ

ノ御参詣ニハ天長地久ニ事寄テ切目ノ王子ノ被ノ葉ヲ

百度千度カサントコソ思召シニ略

長門本平家物語疏島休二山の奉幣と云ふタリめ王子の名を云ば

稲荷社の社の事と云ひて今もあつて

とひてぞ下向一けよ

大膳宮社太平記社の事大故不考と云ふ

太平記不く小祠を造立せり

大膳宮社太平記不く小祠若寺故仰出みて至るの方へ
そ為て後ひある署太平記元弘二年九月廿五日城の役を
官紙始奉つて御供の者とも皆拂衣小寢と掛あら頬
巾眉半小足其事小幸長せれを先き不作とも立らず因
含山伏の急難奉請する件あらずアセトモヤマケル中刀引の
玉手小手と其表を贊祠の事と拂神と呼んで
通称引つて申すを後ひく南無帰命頂礼三所權現滿山
復法十方眷屬八万の金剛寺子垂法和光の月限トト分岐
同居の事とて遂に免ふさびて、射庭奉拜くすと
ゆえあらうへ傳へずるあふ種況を是伊弉諾伊弉冉乃
無位なり我若其苗裔トトて今般自忽不淨を以て

久々
うきひと云々教曰れり幼る冷泉を経て之へ唐子モ
まぎれもて流るく汗トモ水の如く清き歎け換へて是れ
皆血チ小滌トモれど唐子の人トモも皆其身疾石小滌トモべ清氣
もくちくく數ハシ歩ハシひざハシしとも脚櫻ハシを推ハシ一唐子
を捨ハシて路ハシの程十二日小十津川トツ川ハシをささひあれと
行ハシ

按ざれども天正年中大平紀本官へ鬼角にて大峰縁を絶ふ地の峰とよび
お法輪の巻と云ふ十津川下巻より云ふとくに松瀬の峰お法輪の巻の名碑
わらばも化切同よアリ十津川下の所次奉りくもせらわれるくも人ひに口
碑も國くありて後く鬼角と呼ふよふ迂回而て便利の北山次峰切同
を立つひ仰るふ其実小辺ノルバ今更小緑に駿王切同と云ふ事と止り
すとおドモ而て切同川と清じて北山と上洞村とすと南切同と云ふ事
あらず支上り十津川下の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
川の岩村と磨て大和國十津川上湯川村と云フと云々山城と云ふ事の
地と云うセヨ是漢谷ナビハシ河原べりて烈にて其路狭峻険阻にて
今も鞍馬せつ通せば人多ヒと移われを入而数年れものとくハ更て大
平紀と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
序上アリてやお終は入之切同庄と云ふ事と云ひにて十二月晦日より下れば
手引け下森一里と里人くもひて帆と濱をうそと全と候きの人々

今更にわざわざひきと里人等あられど外とのまじめを侮アリまうてさらされ
年と辯申シマテアレハ既にはえれおもそうちいとつ八年と知アリて且
悔ひ因ヒ懲ヒて遂シこ此革ヒ止め一とツヘアトガアソシタス
ナモナム此度此内にて十津川ヲシ傳ケる村ニテ元日ハ食ヒとひ候

渡切目川拜大塔王祠

野呂隆訓

嶠崿幸脫虎狼唇從此折棗入十津偶失一枝安鴈翼更尋
深壑隱龍鱗天心假手廻西日星氣因君拱北辰只歎寒流

乾谷絶誰薦福下淺灣蘋
切目王子の社地の良小町

御所屋敷

セイリニのヨルヒ、自ラ
ヒ佛所下て教の席乞ひ、
小切圓をあくまく持て候。

いよ。とて事細ちばと
ええ社子もあれり又

とへへどすれまくしてまた
のいふへゆきわざを

參初ア王子入宿所室
御所前也但國占寃云人平屋也云小時御
幸入御夢晚景又有題即書之持參戍時許如例被召入讀上
了退出曾無極品羈中聞波野徑月明

紀四編六六四

うちもあぬと多や小浪のうねのまゝれととねの風うね
於此宿所塩垢離カク眺望海非甚雨者可有興所也病氣不
快寒風吹枕

平治物語云

至治元年十二月十日れ倭之波羅より立一ノ又馬
切目れ宿みて追付レテ署大貳清盛と慈和と
不遂レテ切目の右よも駆とろがれ云云接ももて多義抄

田辺君の事と以て
文田を教へ引て

憲淳僧正龜野山金堂記云

十三日終夜雨降今朝雨脚止了次著切目宿南望雲海沉々而浸月前開月浦皎々了如秋有興有感柱記云了望遠蒼波萬里雲心窮旅館一宵夢

萬葉小説
くわいは時切有ふやうて
風吹きにくねま比多うて風ふやとかとまう従うれ

詠一首和詩

遠山諸叢

あかねはまじのやうに
とくちゆきをもむす
かわらのゆゑ

海國晚晴

うら風にまのめ
雲、かくみてけふの月の、
けうやく一

海邊時語

詠遠山落葉海秋
右を博大將軍
主めやん外此
子ちちわきて、お
かくはせとて、乃
のめり
海邊晚燈
あねさゆまをちえ
あ、うな方もよ
い、アミをあらそひ
伊能かみ

詠二首和元

夫漢たゞはけの若原正西

中西のあうたはる
のふとあ
るゆうぢや

海之晚望

なほくやるひのよめ
水

詠二首和薪

着官亮藤原乾光

遠山落葉

海邊晚望

のアスリーチョウ
あらゆるよろこびをも
ゆく

名前於切日主子詠二首和歌

玄佐、玄佐行藤原納寧上

を山海集

まくらとすまきしるべ
まくらまくらやふあられ

いろりくわら

海を眺望

まのものひづはる
まづれなきけいじや乃
ゆすくわら

詠二首和歌

能守も源實致

幸山落葉

そねこをよあ
りそむあくはれくし
りくふ（あくまのじと

海邊晚望

なみのよりてても
やうつてく月をなき
のあまれてすね

詠二首和歌

沙汰寒達

幸山落葉

もうよすくやまとのう
とたすくよすくやまとふ
うすのりすら

海邊晚望

なみのよりてても
やうつてく月をなき
のあまれてすね

詠遠山落葉和琴

侍従藤原雅經

まくらとすまきしるべ
まくらまくらやふあられ

海邊晚望

まのものひづはる
まづれなきけいじや乃
ゆすくわら

詠一首和歌

詠二首和歌

散位藤原隆實上

散住源家長

遠山落葉

遠山落葉

やまへ、山あへ
いもへ、山あへ
きらきら、山あへ

海鴻晚望

やくせきむらくらふく
えつ乃がくかく
あそぶもよ

もみじうやまたまらす
やまとはぢりくわいは
みくま
海色曉空
かづきやろねまへ
ゆづきふりがるものよ
まねやまむ

詠二首和奇

右軍之女、廩寺李景上

卷之三

なほかくらむるを
とくやまわ
乃ちと

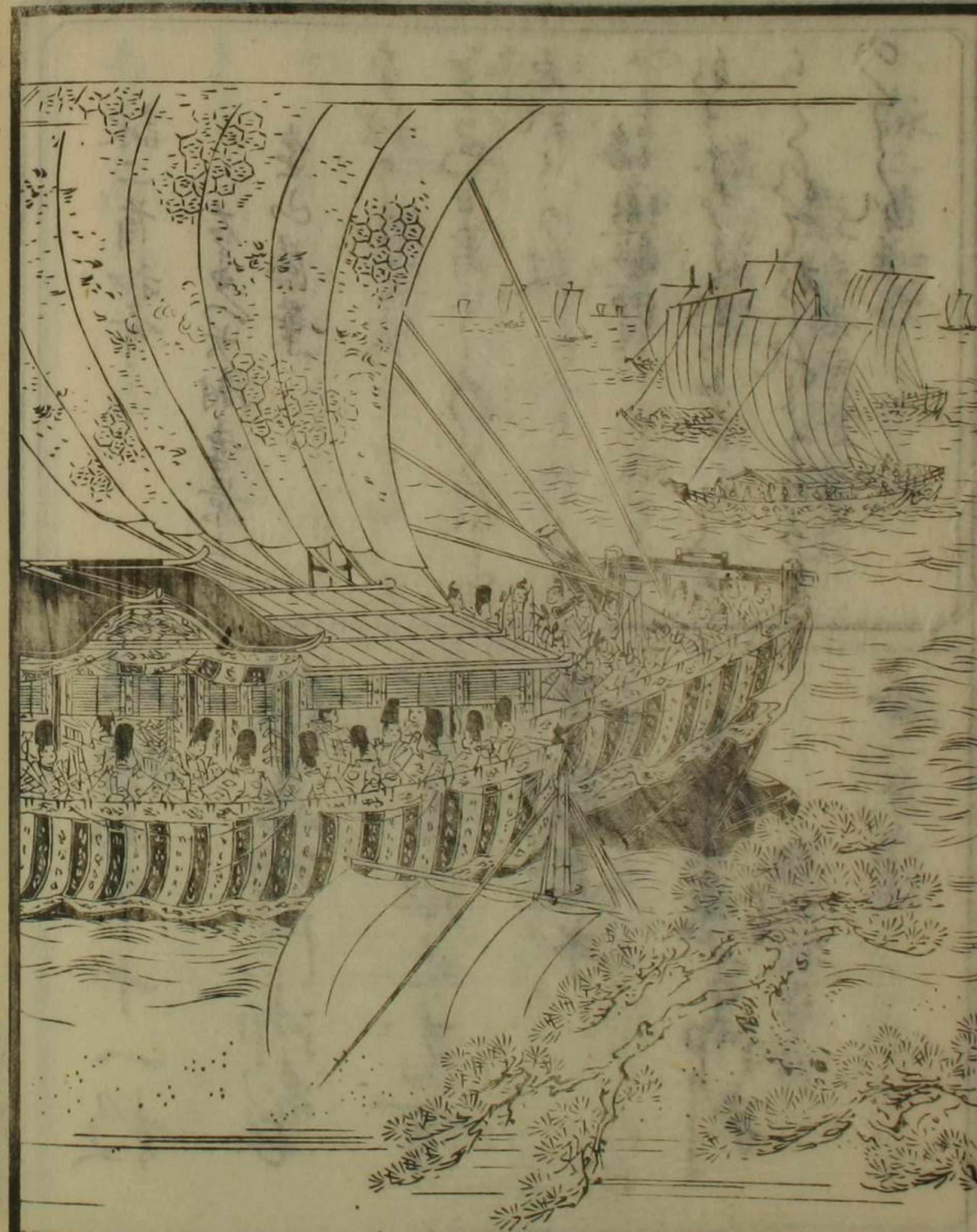
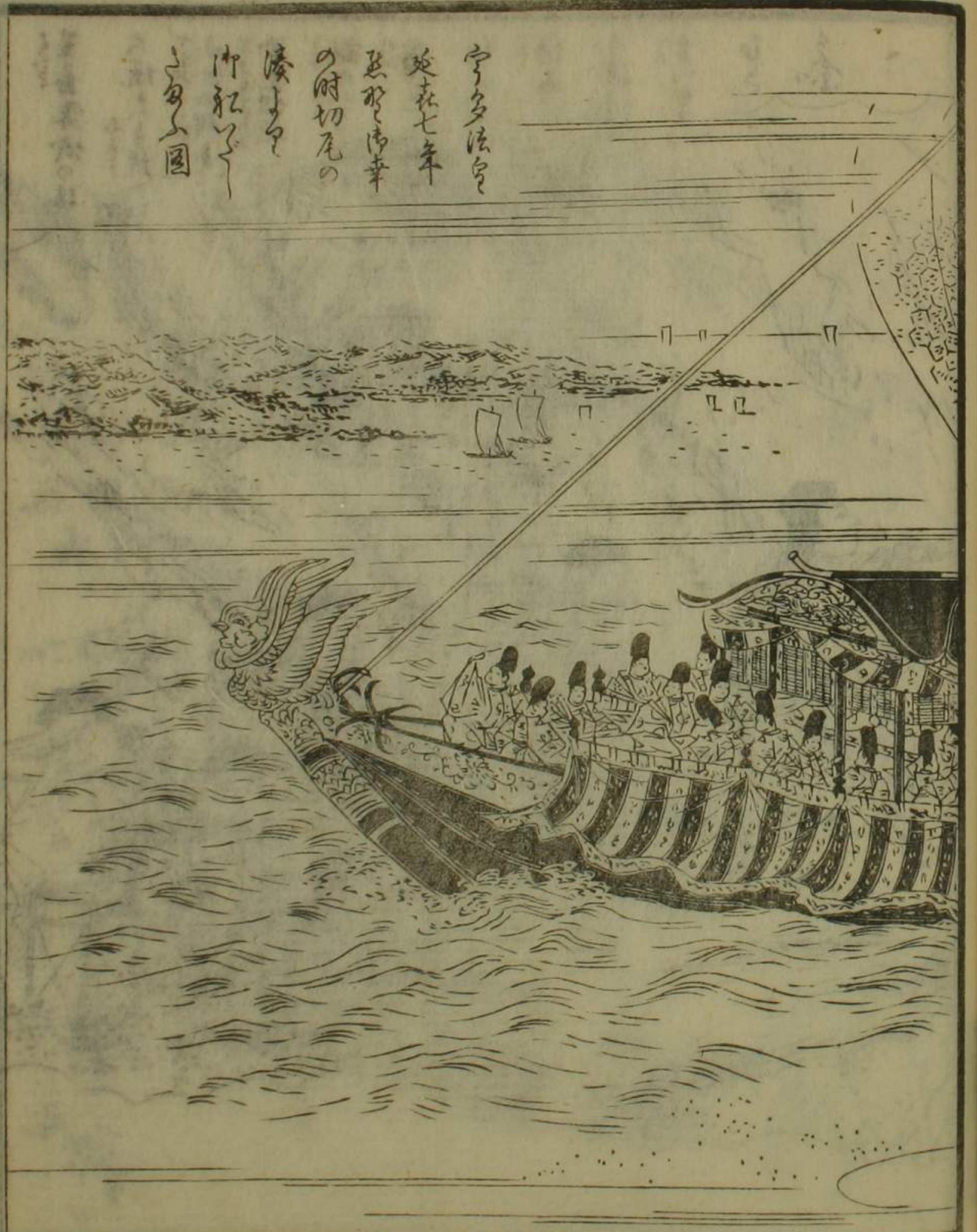
海鳥晚歸

の
れ
ら
う
て
れ
し
ま
る
く
と
う
の
は
う

此懷即十一枚
後鳥復之御製
以下共訖也尤下
辛卯年仲夏

竹隱子詩集

宇多法皇
延喜七年
慈和院幸
の附切尾の
廢する
御船にて
とす

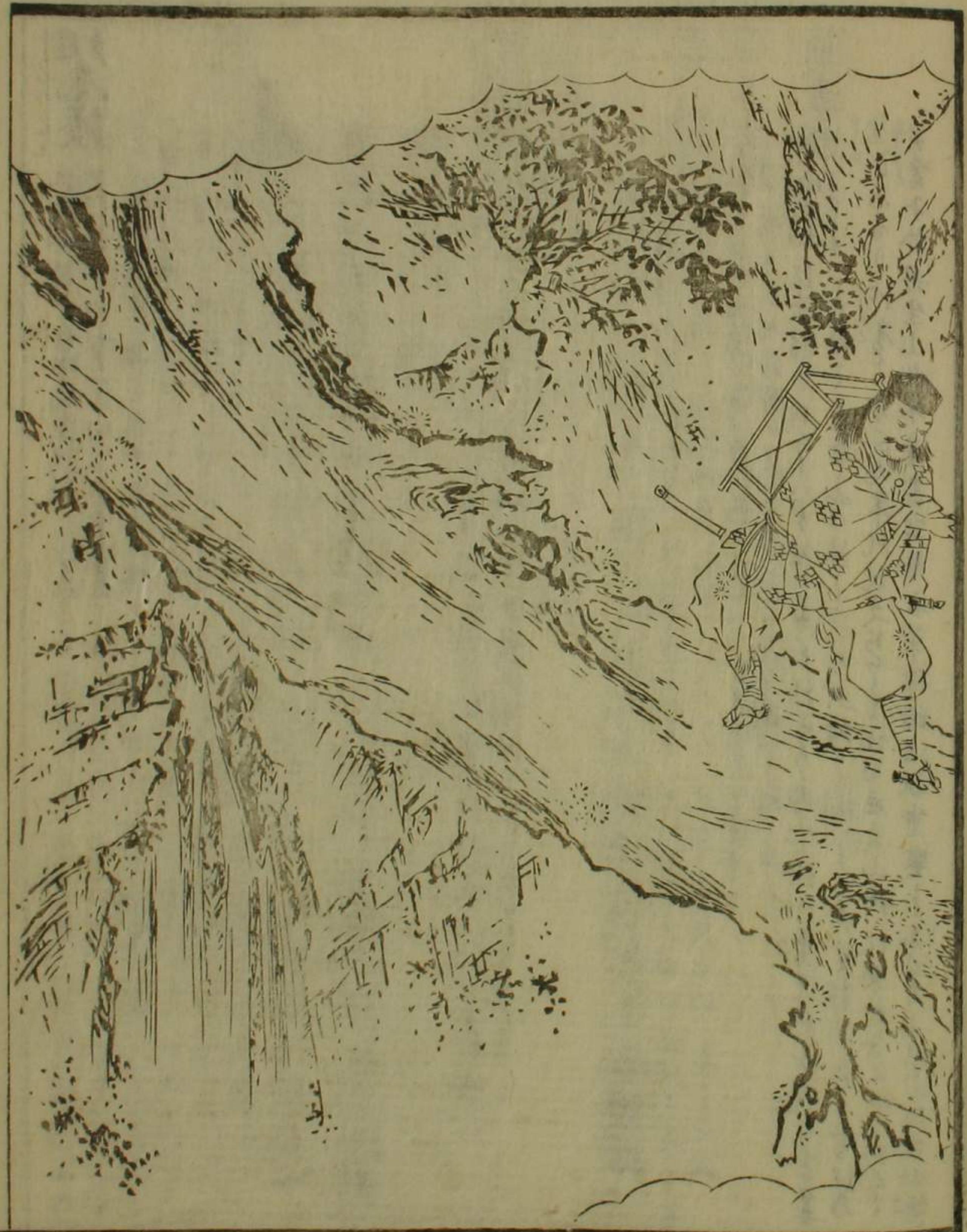


笠置落城の後

大坂えきほ
山脚の宿本

おもて切口

かみつ
もき
かへり
たづ川の
滑水
嶺を
経て
畠のち
れい
旗を



切尾湊

扶桑略記小自切尾湊ス舟アシと引れども今甚所處と失て按て切同川の海口の西乃
くそり切日偏と切尾しつひてモ四回湊アシアシ尾アシテ別尾寄

とつゝる子同ト既ニ近郷有於の清々アリ也。伊とも毛の巣ト、ソシス古哥
イ勢を越海士キトソラニテ多々ドモ其れトシ切間川の変ハタハシ一ト千載以降の事
實ヘ探る子セムクレベ此ニキホトニシカニ一又玉那木園の故ニトモアツムト
法向之比地の主子ニ待テシテ支トモア慈聖ミサヒ外ノセムニタサヘレキ

延喜七年十月熊野御幸也條云十七日辛酉及夜仲平朝臣
自紀伊國來復命法皇以去十一日自切尾湊御舟赴向熊野
神社云今文御幸の云條云載云

神社云々金文御幸の
一條ノ載レ

○ 刀同川 ほりよし地を境にちゆよしとて 川流曲折數多 一 無量沙
切同川 小てひや多也 沿田二村のちを過れて海に入る多波一
玉那木湯 今津より北に切同川をさして玉那
木下 木洞あり 木洞も西人

十音山ノ西ノ海ノ北ノ岸乃王那木乃渓農上乃松木本渡給
新入幡宮 古名村ノリヤスケ村の先古神也ノリヤスケ村ノ代名トテ西野村也村ノ近
佐々木遙一 永徳元年以比ノ延久といへテ神ノ御水聖事と云ふ
白王子家 下津川村草山ノモリヒシ伊くひよ大塔文十津川

時後者一人小死せりと奉一様と
明神社（まつり）松原村（まつばらむら）ハチ村の妻を神より丹生津比賣大神を祀るま妻
の子孫（こしゆ）ま妻山の條（じょう）は村（むら）に在（あつ）て丹生村（まつむら）に在（あつ）る當社乃
生（う）れたり作多永正九年比祝文（いわふみ）に切同庄大山御松原村云云中り
某書ト今冉生山又米寺書寫畢古筆傳而志限

卷之二

切回献村肉

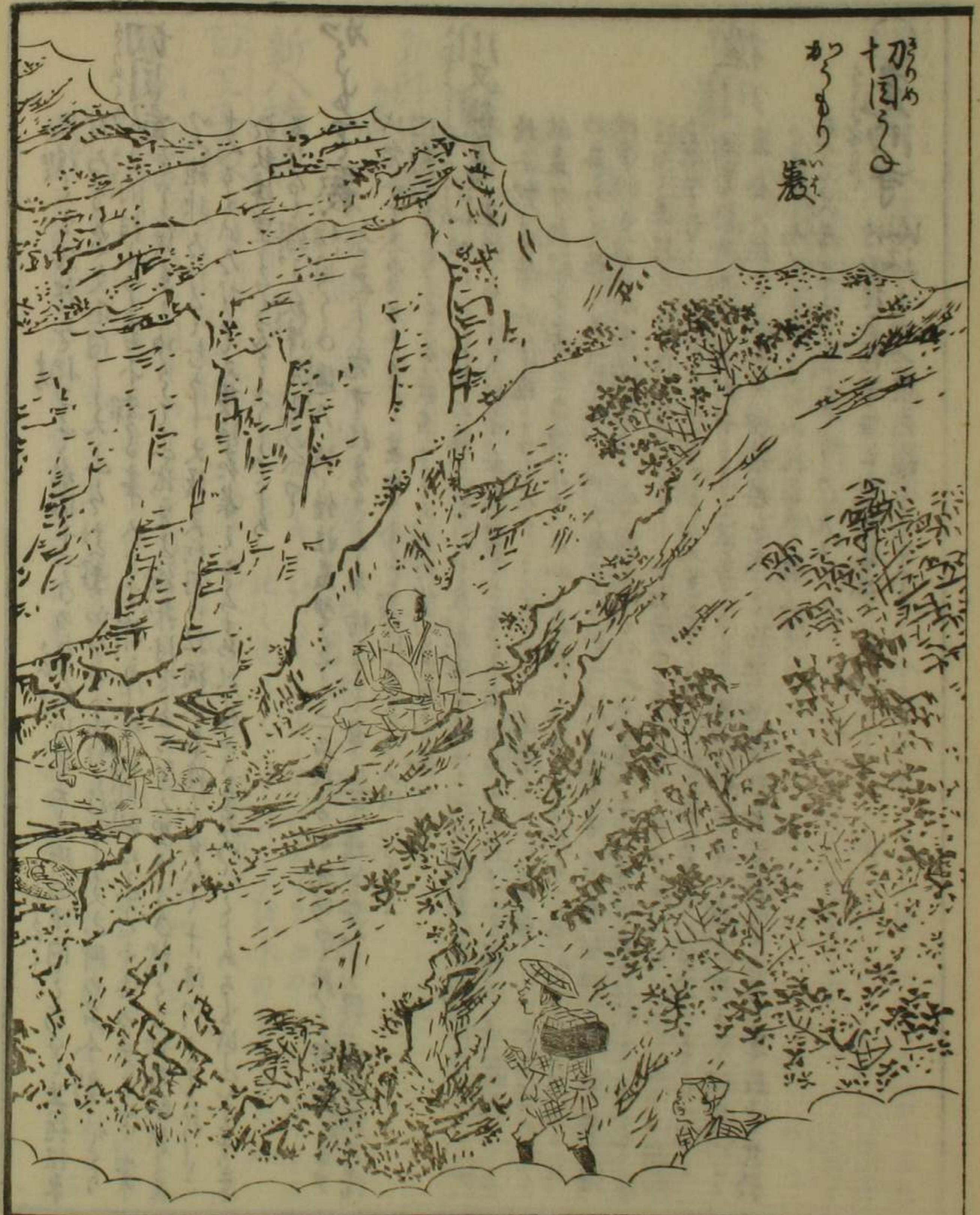
又袍祚乃付之むう一太塔
支へるも此乃其ノ又後御花集
於秋津里より又不^レてよ
る少^レく御^レ秋津在^レ之^ハ
發^ハ切同^ハの通^ハ乃^ハ所^ハ傍^ハ

入ア
以元小て今
巨著黙々と
切

より多治もこれあれ多々とつゝ社煙のたれ合ひ數十丈の櫛引アヒトモの逸情
をもつてや」又其トミ思ちとつて莫キ「湯ノ」をめうり支人食角アモとつアモ
櫛川源南御卿御幸店村場よりと湯をく上ト櫛川村を渡て櫛川村にて切目川ミ
と櫛川村を渡りて說文不積柴燎之也とひアヒ層の事ナシテ一千年妻取アヒ歌
と書てやくそどといふ村行アヒ揚フ

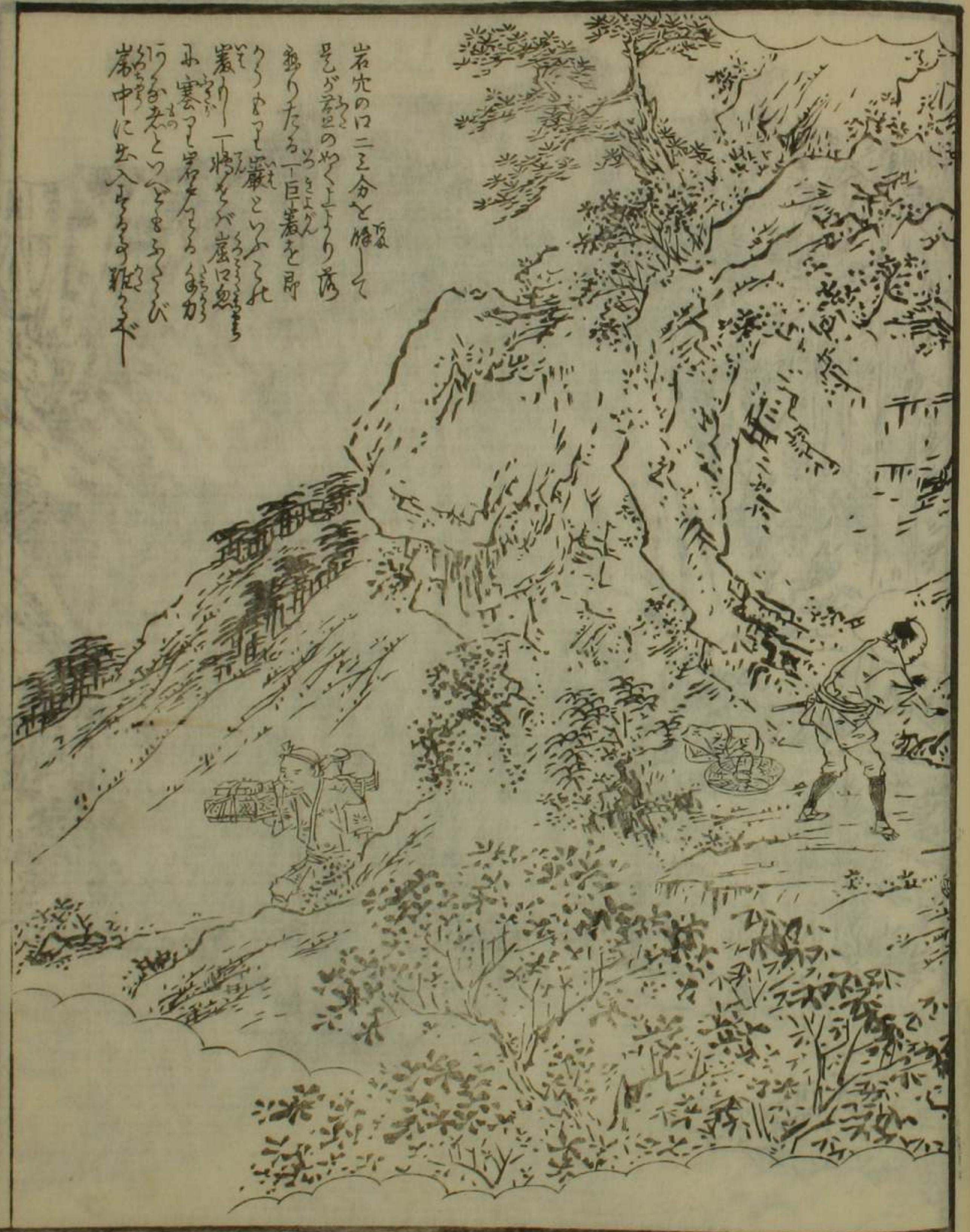
是も火屑あくまで同義ナリんり
光門寺 清田村不白と峰云字號西源
漏上と又焼内眺望

十
かくめ
かくめ
巖

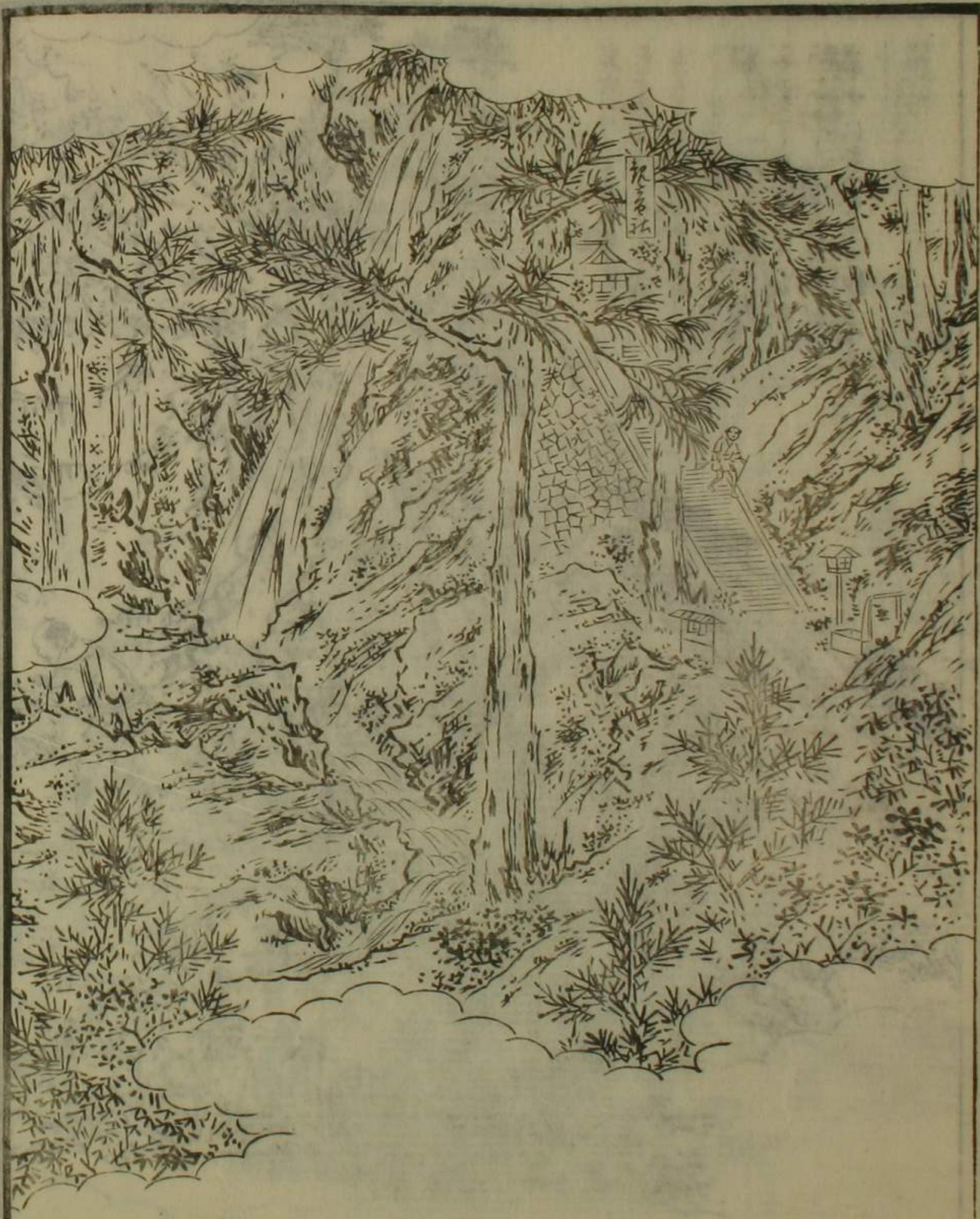
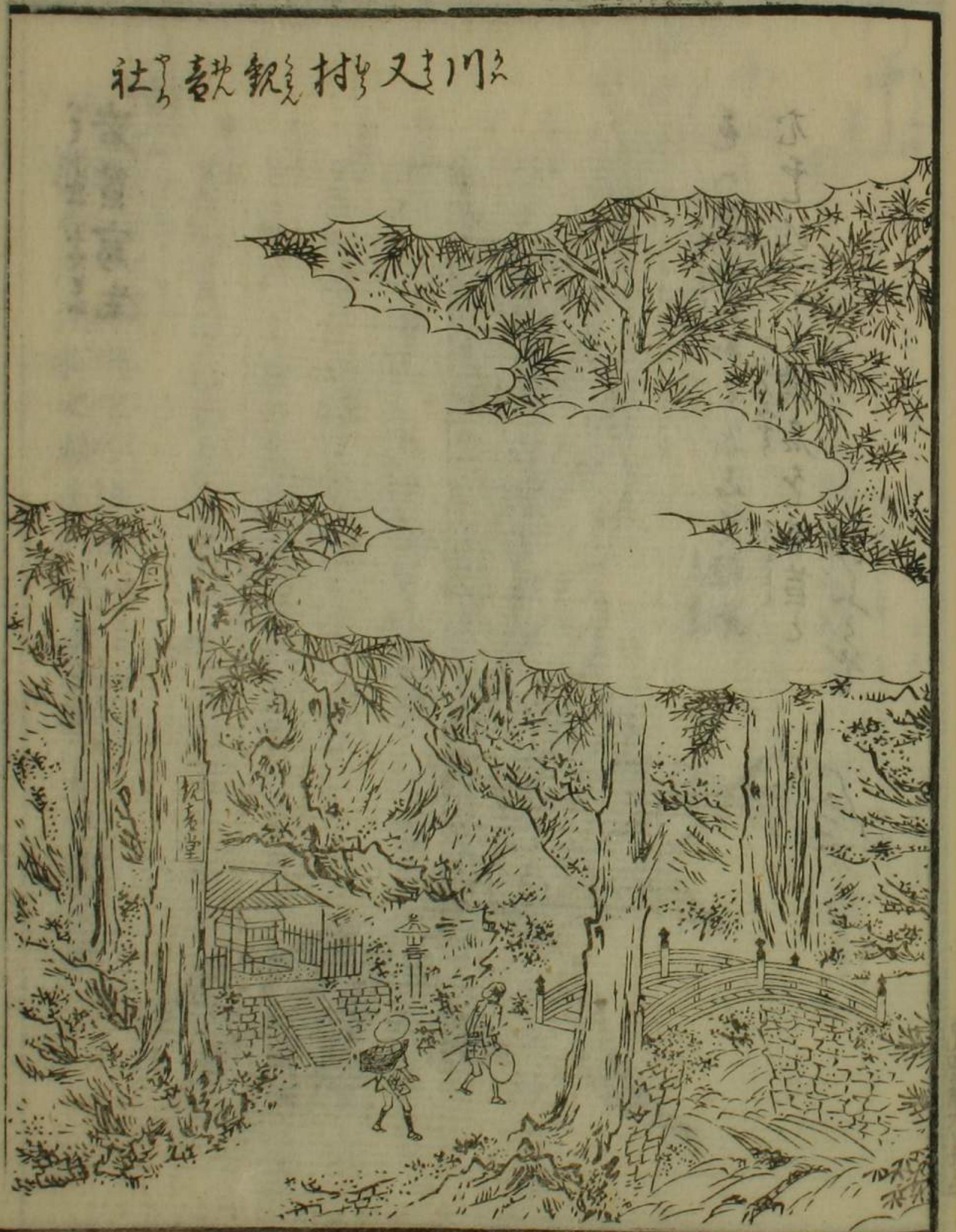


紀四編六九一

岩穴の口二三分と幅て
是が御のやくよりあ
勢りたら一巨巖を昂
くもと巖といふこれ
巖一物もが處に在
み處つて岩をも能が
うる者と云ふるが
巖中に入らるる者



社子鼓銅村又川



岩 茜 寫 生



色ハ藍綠のやくふもて輕嫩
丸毛ほべー 漢名を苦苣と

つるぎ

○中山
萬葉集
岩代莊

殺目山往 反道之朝 霞髮鬚谷八妹爾不相牟

○中山王子洞

萬葉集
岩代村東西二村と御ノ古歌で岩代とよろ

○岩代園

萬葉集
中皇□命往干紀伊溫泉之時御歌

君之齒母吾代毛所知哉盤代乃園之草根乎去來結手名

新古今集
内ワカセ 吾勢子波借廬作良須草無者小松下乃草乎刈拔

風雅集
岩代ノ今後妻と岩代の是れや根と枝と根も多ひ故小かくありて從三位行能

万代集
岩代の是れや根と枝と根も多ひ故小かくありて從三位行能

○結松

萬葉集
有馬皇子自傷結松枝一歌

盤白乃濱松之枝乎引結真幸有者亦還見武

岩代
松

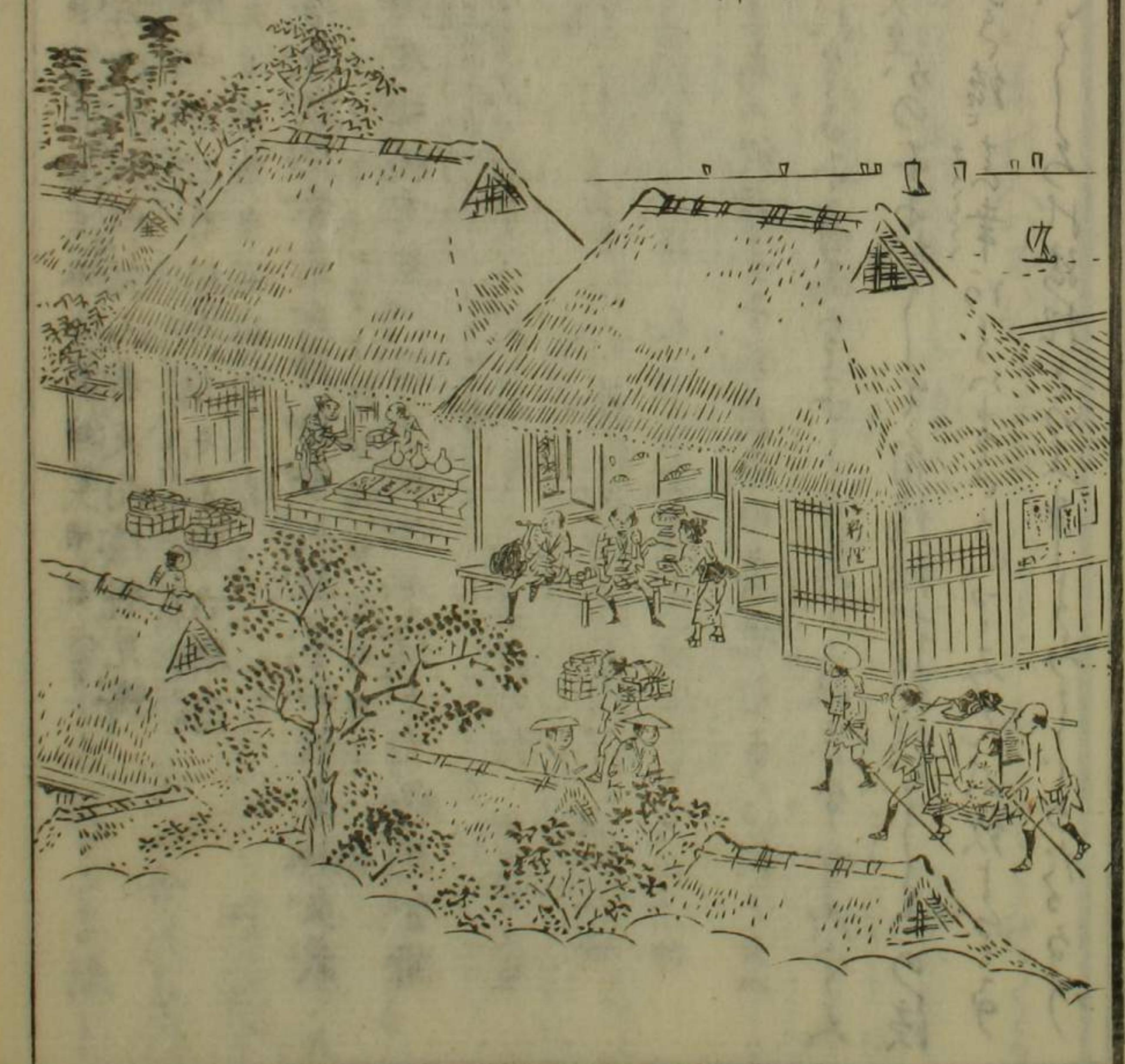


ほろじとやうひ
よしとねの
くわく
むりわきて
老やーねひ
瀬見善隣

岩代のせ中の
まちをあれ

ねも神
さひゆ
そも

加納文廣



美りれども猶くこそ同トクふべー 無くは行ふあくも
あぐそばねもあねもばく地より落じるへふく放りまー半
りくべくれど其傳承く走くれば地中抄するかくくくつへ
あつもひた今ハ内へれ表もむくれど海をもくく表せばちへ海浜よく
磐代とよつけも下すて巻の壁さくさん
とそれをおびあせらばじくへすきく

活死遺稿

巖城結松

那波道圓

別離雖惜事皆空館柳結松情自同馬上歌詩猶弔古

寥々一樹立秋風

家集 岩代のれく風小もくわめく八代の行まれ去

令綱

年浪草

もれどくろんてれあらわしもくド岩代の去 似雲

○岩代山

夫木抄 神も又御ひ公やあせん岩代山ふくゆく

平忠度朝臣

○岩代尾上

後拾遺集 堀川百首 岩代の尾上に風もくわめく八代の行まれ去 前太宰帥資仲
庵主 おれゆくあくもくわく岩代の尾とふくろれをみるも 仲實

明日井集 岩代の尾上に風もくわめく八代の行まれ去 増基法師

石代野

万葉集 事痛者左右將爲乎石代之野邊之下草吾之刈而者

新後撰集

新続古今集 石代のれく風もくわく岩代の尾とふくろれをみるも 增基法師

大藏卿隆輔

後鳥羽院

參議雅經

守覺法親王

後鳥羽院

家集 岩代のれく風もくわく岩代の野並れまふくく根代 從三位範宗

家集 岩代のれく風もくわく岩代の野並れまふくく根代 後鳥羽院

夫木抄 岩代のれく風もくわく岩代の野並れまふくく根代 守覺法親王

岩代の野並れまふくく根代の野並れまふくく根代

頤德院御製

○岩代茶

新換六帖

御幸四度

御先達權大僧都法印和尚位覺寶
印真而達二僧尼法印口向立八亂

御道師褚大僧者法王和尚位公瀟
內大臣正二位、兼行旨近衛大將軍

內大臣正二位兼行右近衛大將軍傳授朝臣通新

卷之二十一

次々如此殿上人上北面僧寛快已下三人下北面皆書之此
按すてうるめ古今年又宣淳傳正入堂記句とあわし當社ゆく名とある一説有て
云はれらうふるもがつねて落成多忙傳入款とく當社ノ記入小似たり其傳作多く人

四日略次經浦路參岩代王子面々注

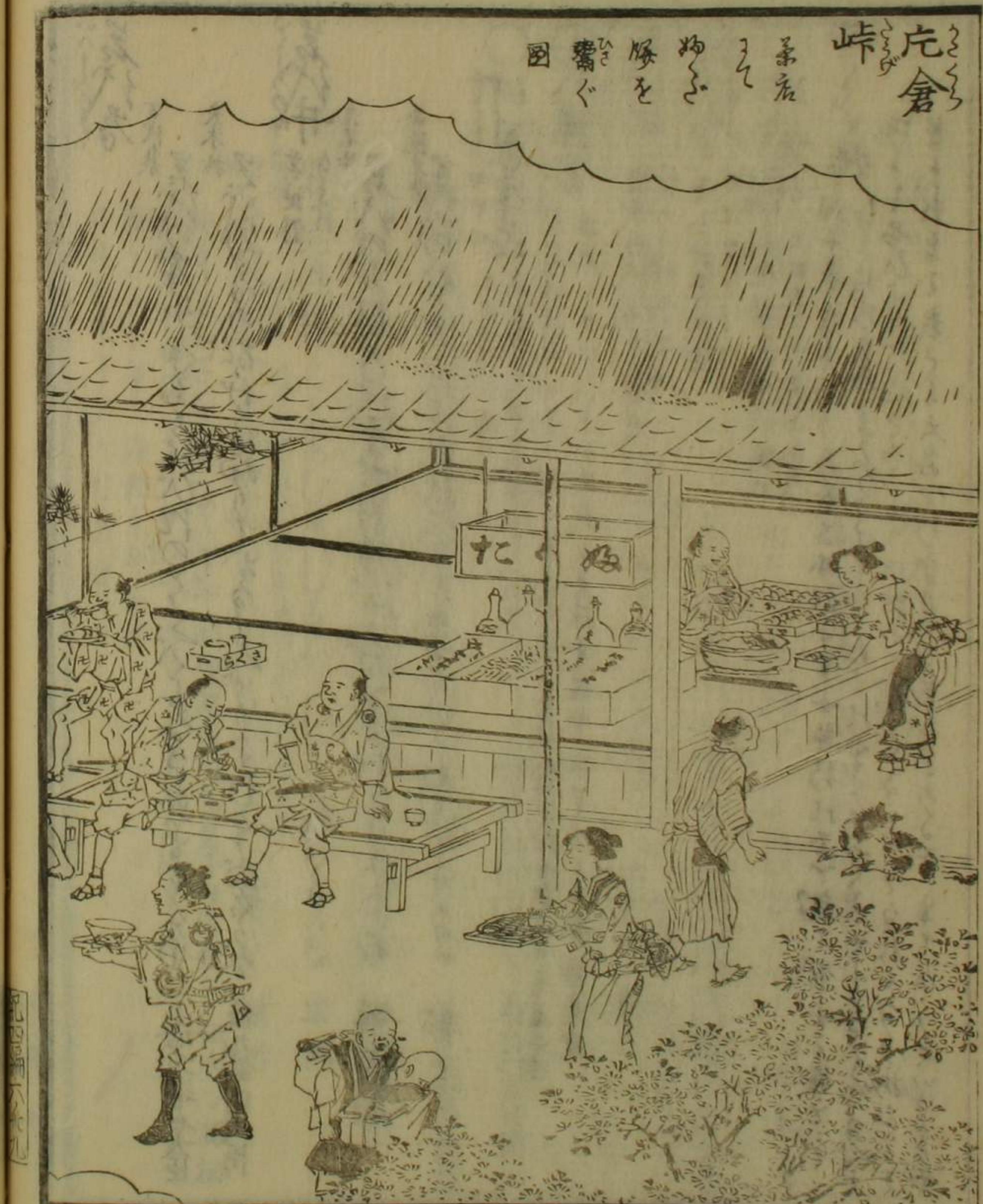
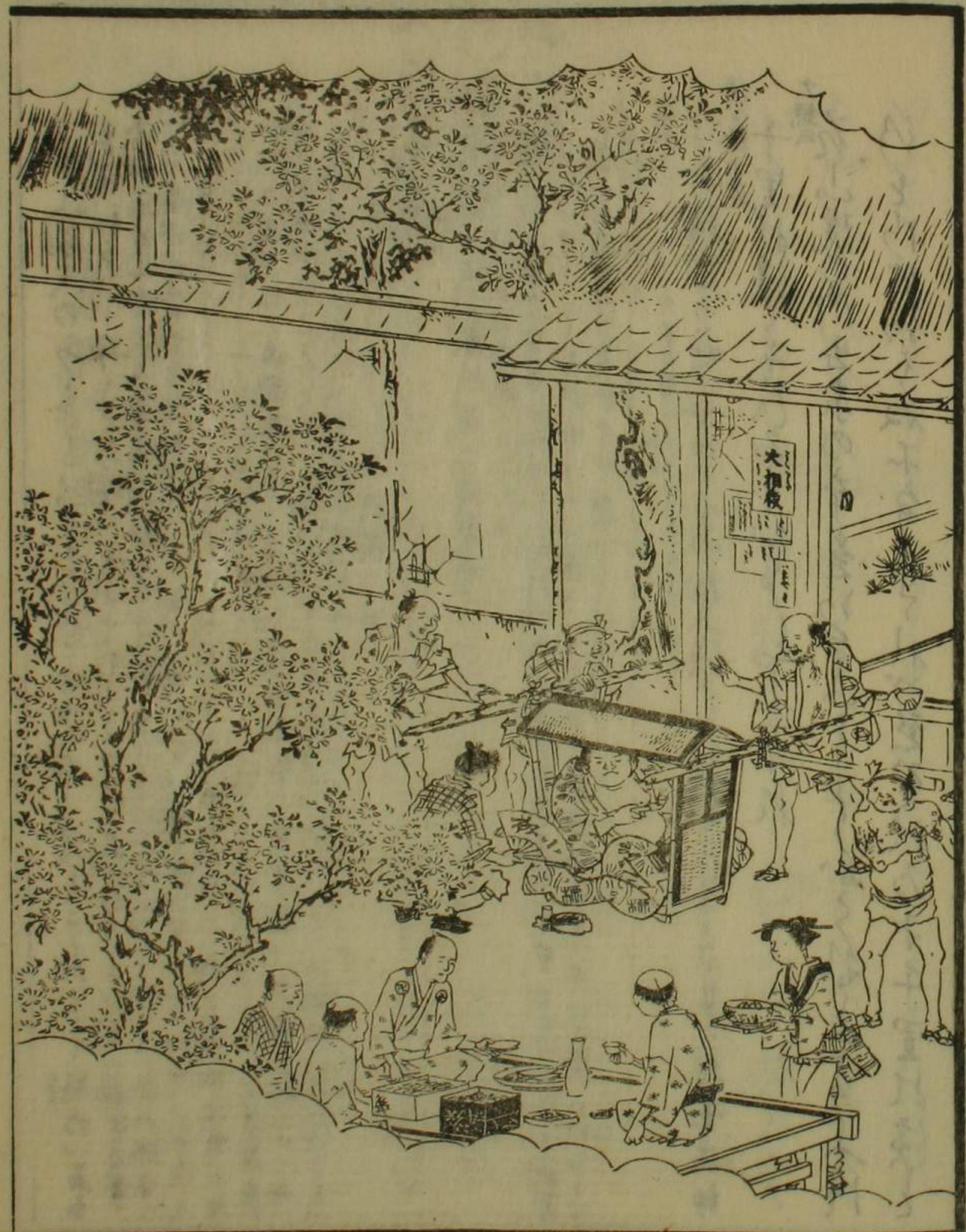
卷之三

新編古今錄
卷之二

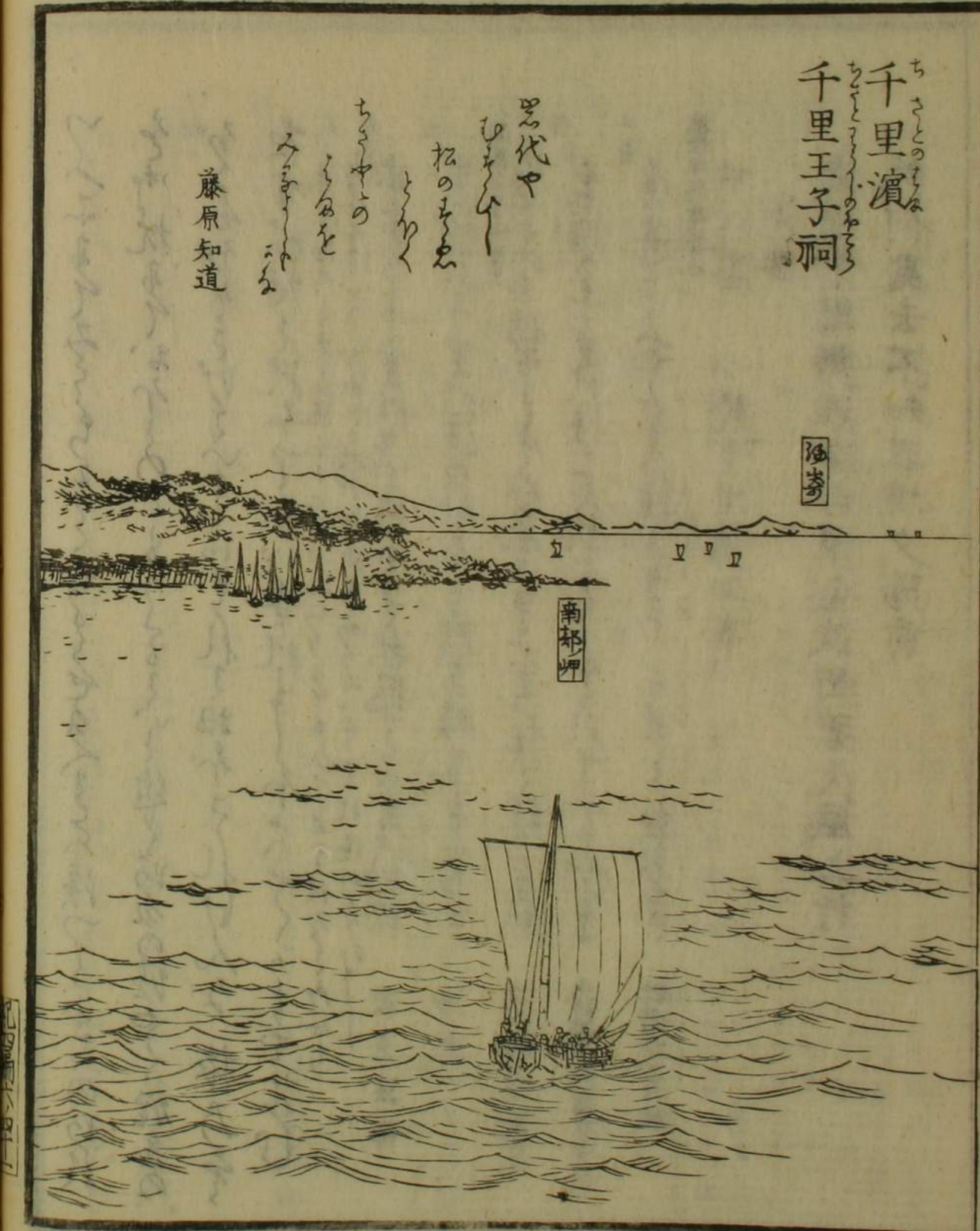
平家物語

元鷹元年卒惟塵絶時乃比陳小蘇代の主と和子と
主子と姉ねえよあめうきく絶千里比湊のかつ代乃王
子れ唐より下てお紫素れ者七八騎ぐれりひまく
も下ふからめとくしりんはとおがくと、名媛の力下もとく

寒淳僧正堂記



下嶺
庵倉
物を
鬻ぐ
図



安藝國福王寺藏

千里濱名石圖



右

孤然る月の空歟の清風すゞぐる清流へ秋乃山幸

夕陽斜影雖甚薄夜月清輝難當暉

奉記云
元弘元年七月三日大地震りて紀伊國千里濱れを千宿
係小陸地となりる二十余町

因てつゝ年來物浦長門奉疏黄が鴻の條下夕く清流紙
いづれより千里れ濱とひからしてよ川谷河を浚るあり
至るまほんのうきれ罪もやう消されせばとたのゆ
くとぞひける

千里王子祠

千里濱下りア石泊也中秋月一附三里を越る事と御寺
湖山に宇文に幸ね故御走毛河を河也御社御宿也れ也

御幸記云

自是又先陣過千里濱

此處

一

町許

參千里王子

產物珊瑚砂

千里濱淡々多珊瑚樹の
小枝を拂

名石

此石流れて今安藝水猶立ち氣
かの寺に至り其石の形似玉一あれと謂くはまく裁次

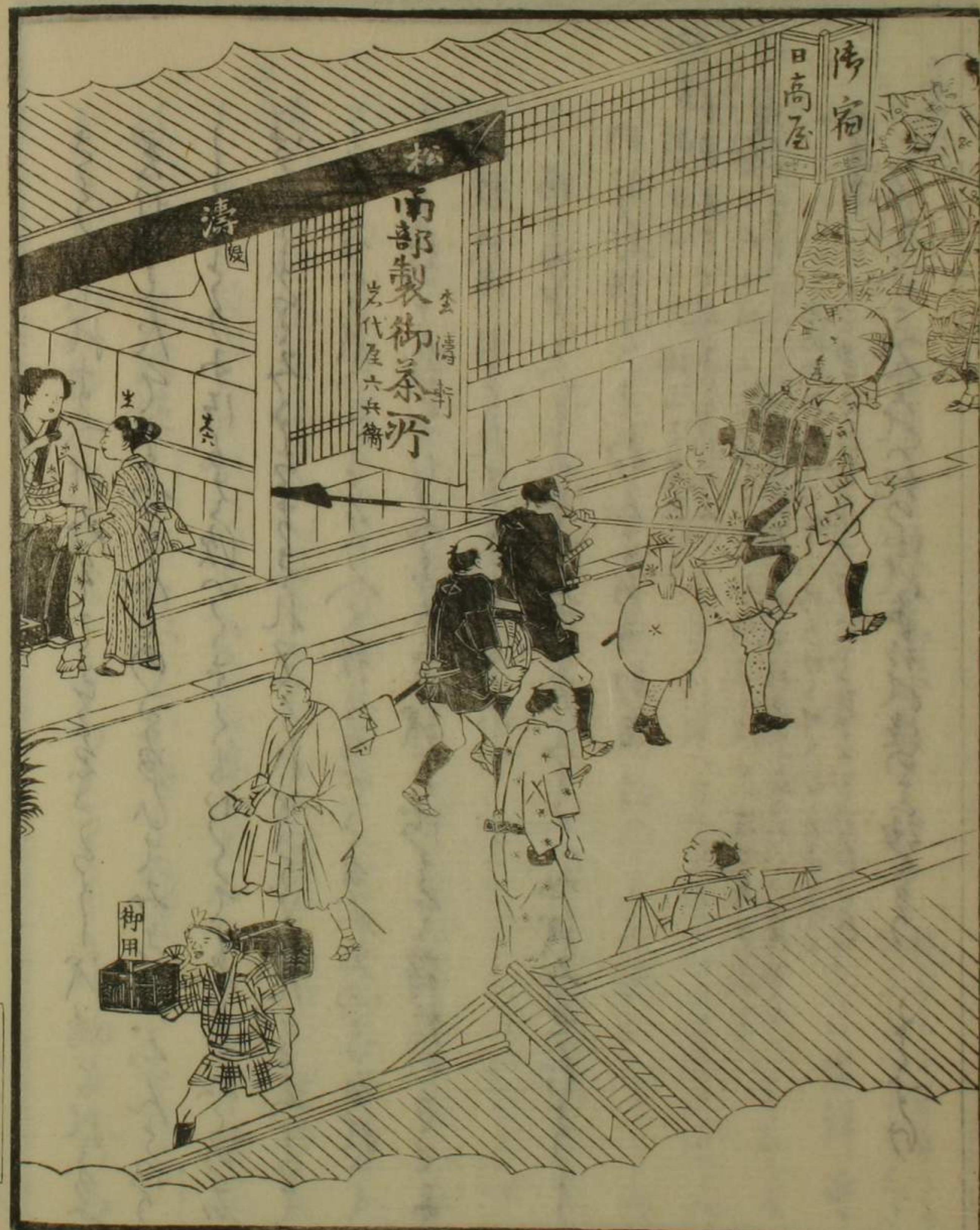
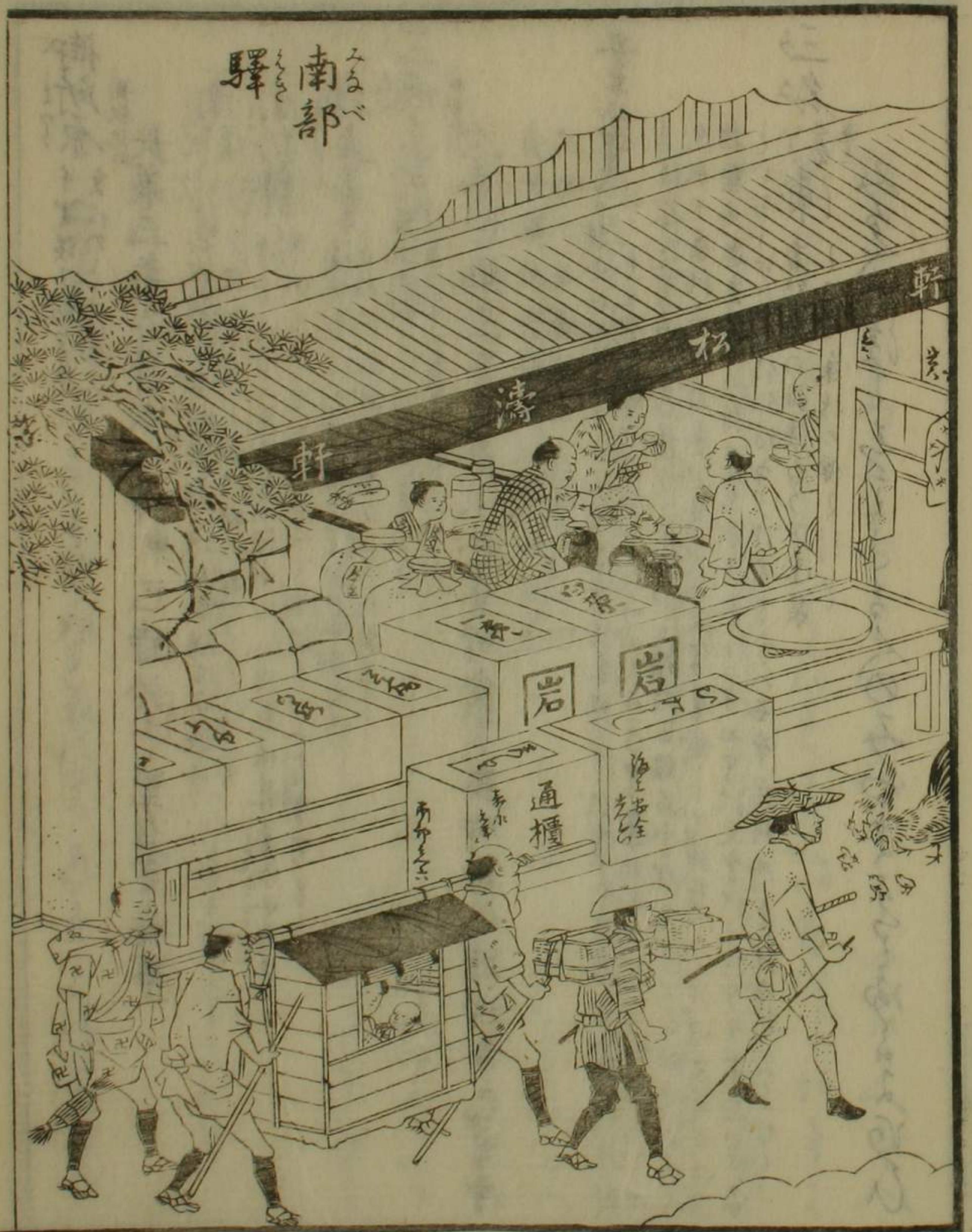
次假く

伊勢物語云

れまくられみどりをもとめ
えりまたまくらんとのまひてみどりがんく
てとふほくをくだりもや
りよくまくらあきるまくし
うりへとくたてまくわ
あうけんとく人く歎よきをまくわ右のうね
あうける人のとりんまきおはくらくす育経のうく
い歎紙はたてまくわ
いゆまともかくすをくねくねくらむよ

同津時 幸村の坤 海上にて實也
其處と大もどりとつる
千尋海 又千色海とも名ふ今はうきはん海の名とづく
千尋海 うきはんべくとへつの原より千里北の一名のくしふい也

拾遺集
五代を、かく余れの紀のよれも、あれど、秋のまゆとさり

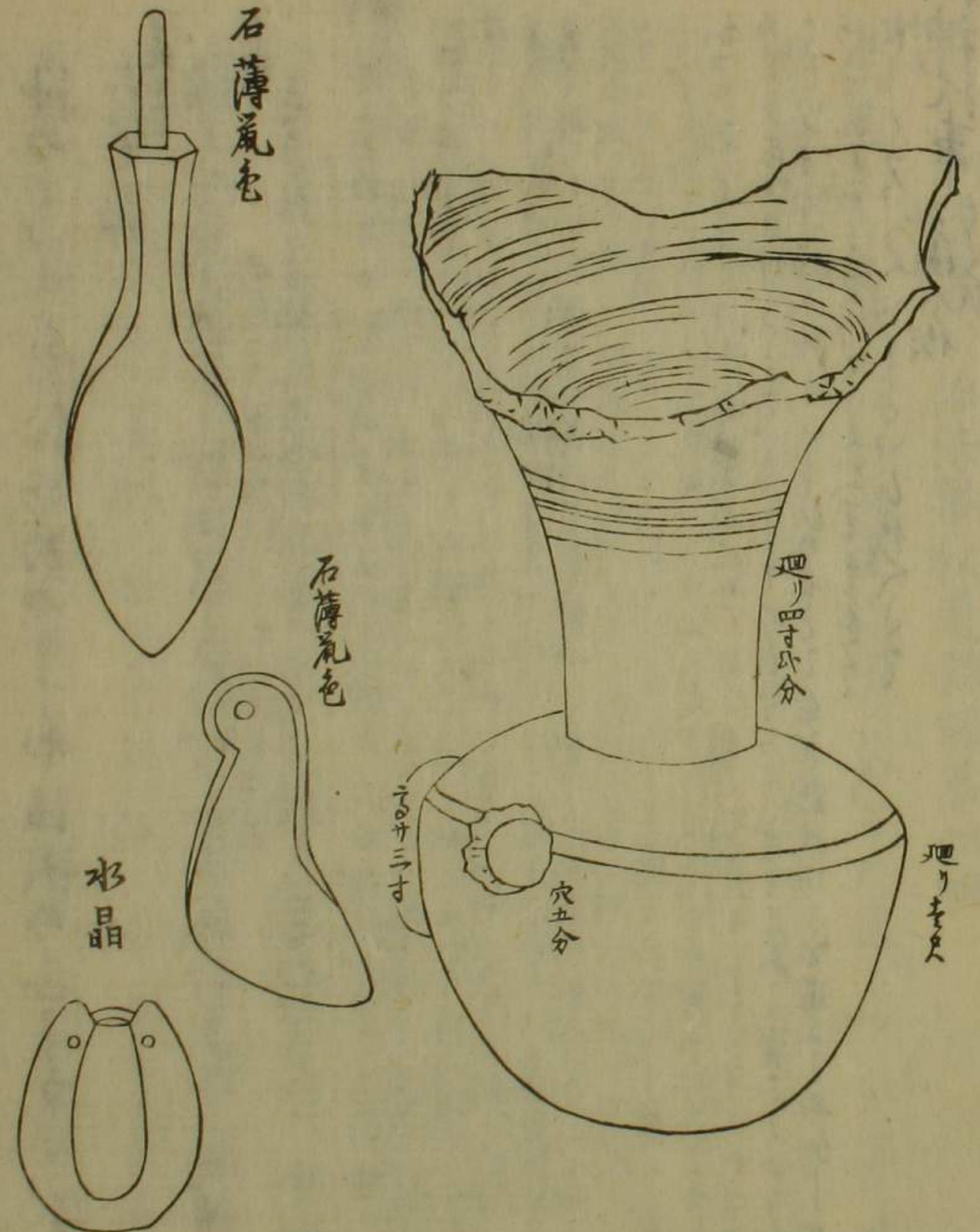
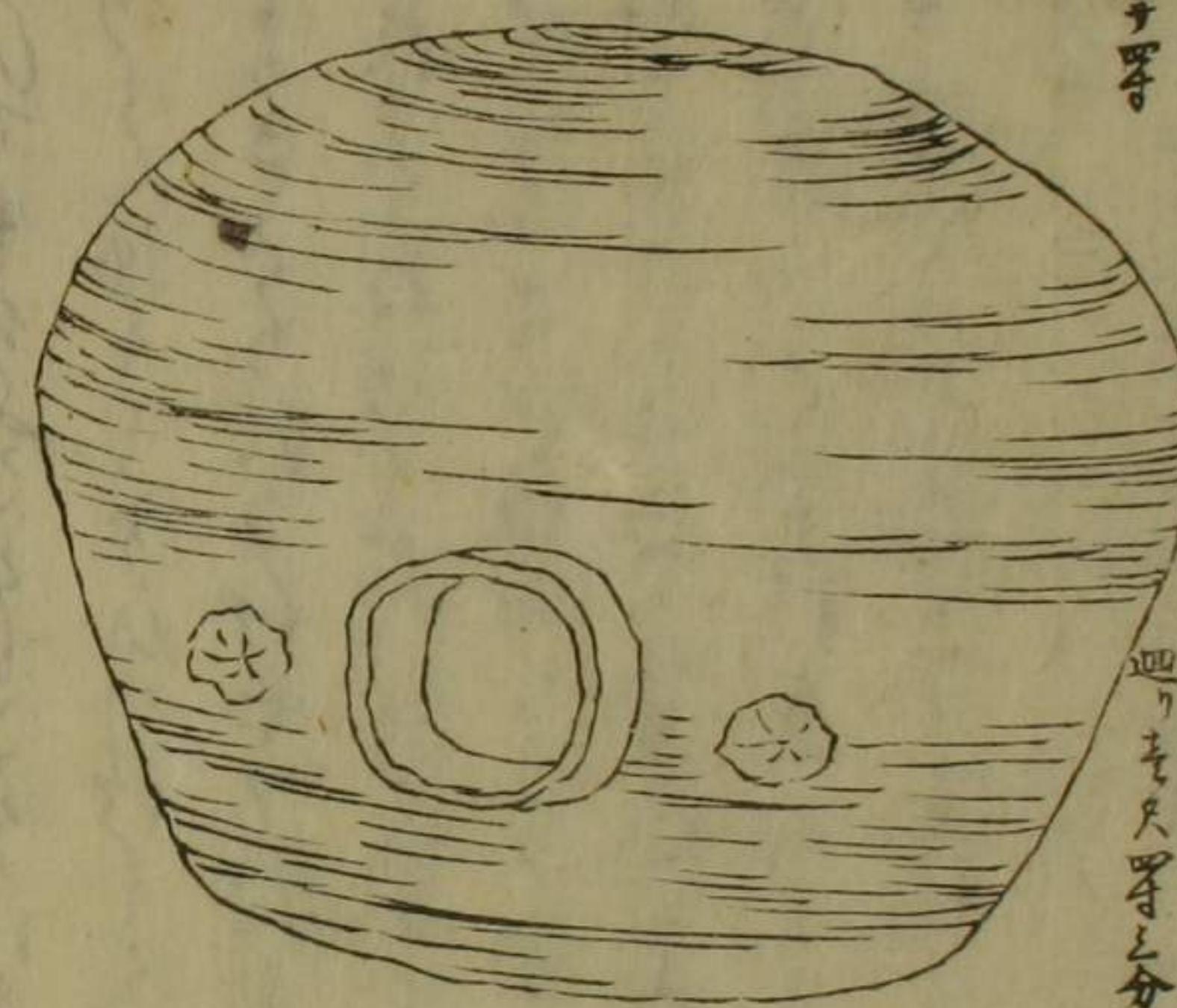


芝村養育境内にて近年
場出しへの瓦器及々勾玉の圖

三手等

四寸九分八分

豆りがす八分
四寸八分四等



石薄花色

石薄花色

水晶

四寸八分

四寸九分

四寸九分

記四

うどひてまかねにあわててへとへとおもて

卷之三

哥枕名寄

家集
麻六より 滝乃とうふ屋、之名新浦にて
まきねと筆ひみの浦生て重代被て傳ひむ
令綱

卷之三

異事

かのト

一
輝の

卷之二

四
三

卷之三

卷之二

新編
本居宣長全集

卷之三

卷之三

けち

卷之三

卷之二

四

松
山
中

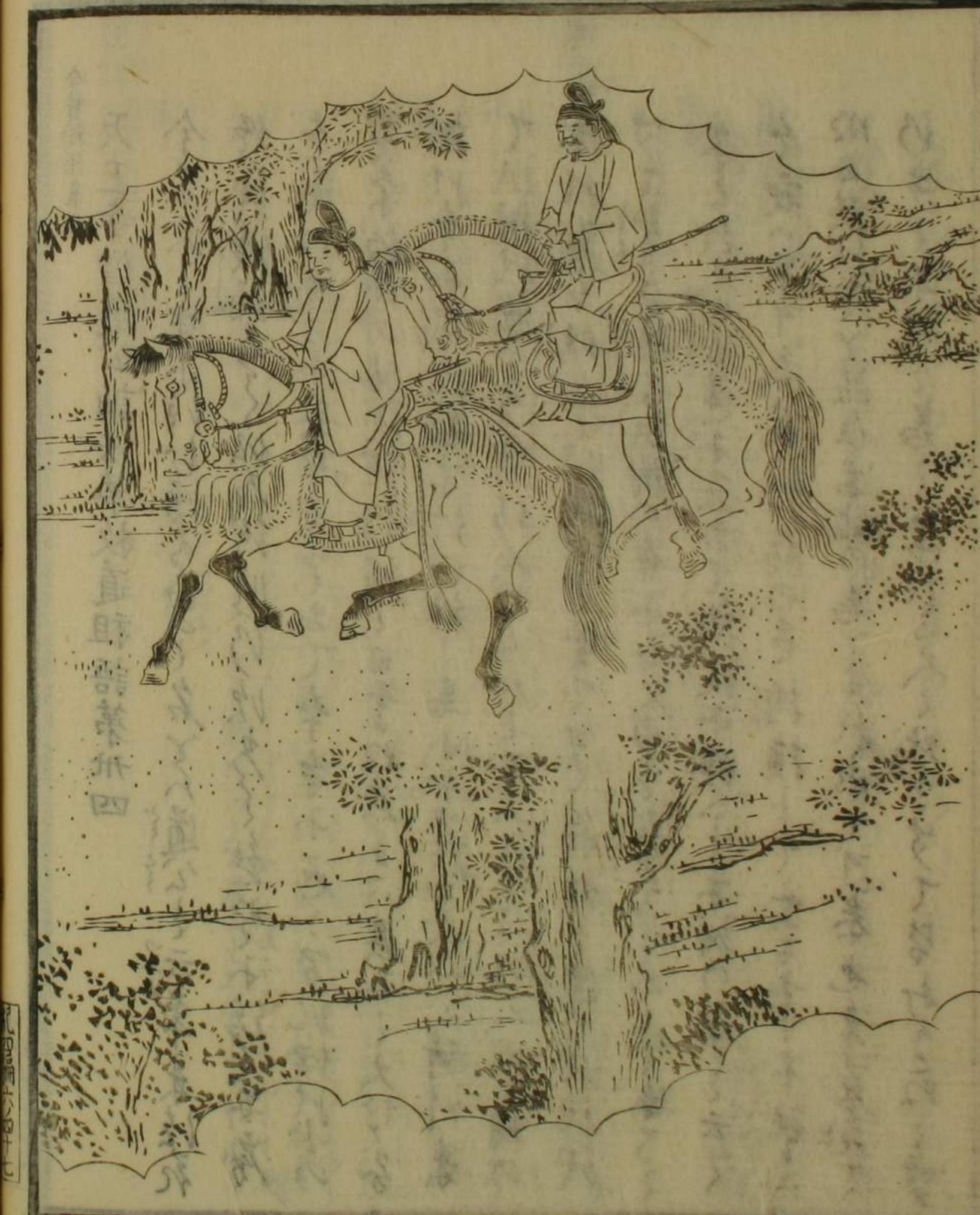
通祖神代事
トセイジメイジ

今昔物語集云

天王寺僧道公誦法華經道種智言第十四

今も天と寺お絵し傳えけと名と云通公と云年東法衣
修復凌涌^{トクヨウ}とくひな城に次第^{トク}と然也と小治て安房
を範ひ而る小築^{トク}と出で奉寺^{トモ}也る紀伊北の
支那新卿の海辺城^{シマヘイジ}と曰すぬ者とハ其ふと大りる
樹れ奉^{トモ}と次夜^{トモ}またの夜^{トモ}馬小^{トモ}すれ人二と騎^{トモ}計奉
てひ樹れ迎^{トモ}と^{トモ}人^{トモ}かくんと^{トモ}と^{トモ}夜^{トモ}一の人^{トモ}とく樹の
幸れ翁^{トモ}と候^{トモ}と^{トモ}ひ樹下^{トモ}と^{トモ}言て云く翁候と道^{トモ}此れ城
づて^{トモ}と^{トモ}往て^{トモ}ひ樹の幸^{トモ}と^{トモ}人^{トモ}の^{トモ}翁^{トモ}と^{トモ}と^{トモ}と^{トモ}
まきれ人の云^{トモ}を^{トモ}お出^{トモ}て^{トモ}内^{トモ}候^{トモ}と^{トモ}赤^{トモ}樹の幸^{トモ}と^{トモ}云^{トモ}
そ^{トモ}取^{トモ}不可^{トモ}參^{トモ}其放^{トモ}駄^{トモ}の^{トモ}打^{トモ}換^{トモ}と^{トモ}まる幸^{トモ}不^{トモ}被^{トモ}
所^{トモ}駄^{トモ}と^{トモ}流^{トモ}赤^{トモ}化^{トモ}の馬^{トモ}され^{トモ}來^{トモ}て^{トモ}可^{トモ}參^{トモ}也^{トモ}幸^{トモ}走^{トモ}て
引^{トモ}歩^{トモ}不^{トモ}と^{トモ}馬^{トモ}まれる人^{トモ}此^{トモ}を^{トモ}うて^{トモ}打^{トモ}と^{トモ}ね^{トモ}

今昔物語
故事情の圖



くを嘸ハシめよぶ道ハシと板ハシと枝ハシと葉ハシとて樹ハシれ奉ハシと
アスハシ小物ハシ元ハシ一ハシ只道經神ハシの形ハシと造ハシふるもと其形
影ハシにて多れよと御ハシりと云ハシも男れ形ハシと云ハシ
女れ形ハシ元ハシ前ハシ板ハシ書ハシ馬ハシと云ハシそれと破ハシを
たゞと道ハシ此ハシを見ハシねて板ハシの云ハシける也ハシりと
ちよく御ハシよ寄ハシ矣ハシと云ハシ其後馬ハシその木の破ハシれを
系ハシと云ハシく縫ハシて奉ハシれかく至ハシつ道ハシと云ハシと今板ハシ吉ハシく見
んと云ハシく其日多く為樹ハシの奉ハシとて板ハシと奉ハシて奉ハシあれ
やく多れ馬ハシと云ハシれ人奉ハシぬ道經ハシと奉ハシと奉ハシて奉ハシて
之ハシ行ハシぬ曉ハシて板ハシと道經ハシと云ハシと奉ハシと奉ハシて奉ハシ人ハシの
手ハシ弱ハシ來ハシと云ハシ人ハシと不知道ハシと云ハシておハシと云ハシく至ハシ人の
明白駄ハシの多ハシ破ハシ療治ハシと云ハシて弱ハシいの公ハシ子ハシ次ハシ第ハシ
ウ些ハシ恩雅被ハシと云ハシ樹ハシの下ハシ道經ハシ此ハシと也此乃

多代馬ハシと云ハシ人ハシへ初渡神ハシと云ハシ次ハシ内ハシ城ハシ四ハシ時
と云ハシ次ハシ省ハシと以ハシて井役ハシと貢若ハシ不ハシ者ハシ奉ハシ來ハシハハシ答ハシと以ハシてお
ち云ハシと以ハシて罵ハシる所ハシの者ハシ實ハシ小罪ハシ甚ハシ一ハシ共ハシべ今ハシのト旁ハシの
休ハシと弃ハシて速ハシと上品ハシ功德ハシ比身ハシと済ハシ人ハシと云ハシ其ハシと聖人ハシ
比序力ハシ不可ハシ依ハシと云ハシ道公ハシ言ハシと云ハシ宣ハシと云ハシ妙ハシ也ハシと云ハシど
此ハシれ氣力ハシ不及ハシと道經ハシ云ハシく聖人ハシの樹ハシトハシ今三日ハシ而ハシて
法經ハシ經ハシ渾ハシ一ハシ終ハシ人ハシと云ハシ秋ハシと法經ハシの力ハシはて忽ハシ
告ハシ身ハシと弃ハシて樂ハシふハシ生ハシとしハシと云ハシ擰消ハシ板ハシ失ハシ人ハシ
道經ハシの云ハシ小過ハシ二ハシ日ハシと板ハシ其ハシの云ハシと云ハシと云ハシて法經
強ハシ經ハシ次ハシ四日ハシ不ハシ亦ハシ奉ハシれと道ハシとれハシて云ハシく象ハシ聖
人の意ハシ想ハシて今既ハシの者ハシと弃ハシてまきハシ者ハシと済ハシ人ハシと云ハシ
云ハシ得ハシ度ハシ云ハシて觀ハシに眷屬ハシと云ハシ井ハシ位ハシ界ハシも
此ハシ度ハシ法經ハシをすハシするれ也ハシ至ハシ人ハシ若ハシ其ハシの虛ハシ實ハシと知ハシむ

と思ひて草木れ枝とひく小さき葉れ松を造て御木
儀と無くあれよ小室て其作法誠可見給一と云て揆消つ
極く失ぬ其法道と道社の之を小室と忽て松を造て此の道
祖神の像伏安でくあれ邊て行く此とあれよ放ちゆづ
其時て風不立波不動して紫れ南と持てても又
道云乎伏えく紫れの不見底るすく邊くれねして互に
又其の御て走る人モ其の人れ多て此樹の幸れを祀
并れ於とめて光を放て照一輝て紫葉と寂してあと持
てき小鹿び昇ぬとえけと道云此のすと拂く候て幸ち
御く御法あれ地と涌きるす不思と道云グ涌るとてて人皆
走ひけりとけん拂ひ仰ぐれと也

詔せ寺代永年坐於四辻庄等不未ち多く當今も猶存れ
一宮権現社本庄庄材より至本庄村御靈宮と號せざれ秋
ノ高處の表た休身しと文殿上株の株れ行也

被菌御靈宮西本庄村からて庄中大木村の表
當社本庄村より御靈宮よりと御清セアシヒト御人
御靈宮御靈宮と云は御靈宮御清セアシヒト御人
ト向セ一體小御靈鏡御靈鏡と云は御靈鏡今も御靈鏡
あり其式武氏の事りとつゝ又御靈四年れ株れと
始て文安承と水縁等れ事興れ株れ等り有くな
なり

領主愛洲兵部大輔源然後 西父曉閣梨善祐

造宋 南部郷庄被菌御靈宮二郷社明德二年十一月廿日 太郎丸貞宗

栗田正徳大工正近

勅進僧東福門葉長貞上座

貞永 三郎太夫

附邊民傳海西本庄村小二ノ和田と一ノ平原と一ノ幡山と一つモ邊民ハ名ふ
其の文書と聖邊境を度す所とスモ又祖園御靈宮社永正の株れ

本
南
部
東
莊
滄
谷



四編六十五



祇園
御宮





北山小野の聖武聖邊跡と寢泉と見えゝる人也古老れ傳へ是忍此奇政と
憤りて村民あそくとひに車猪専守の記述す。都見えたる
瓜渓 西卒尾村の南と町許にて渓の口ある窪
抜けれ石もあらの山腰貴もくをふたり
產物多石 瓜渓と產れ漫々採る事と先づて卒小屋石頭產するふハは谷と
年妻歌たて屋谷と二ふありてちを公比方生て名すえられどい
ぬれ石を。或も右屋谷の生と次生れども石壁不候少く至り右屋谷比方
もと津糸アモテアモ多くは岩れゝんや。うちもえれよれ多
ども老け奇態万状あり
好車比把院と見る一すり

漢琴山房詩

琴山房詩
林谷山人余舊交也已未冬日遊定海華市携
歸南紀寓淺浦之古碧樓者數月今茲二月將
歸東都余嘗在溪石數枚且係以七言長句
不談上古事雲飛煙滅五千年山人不談今時事
淳名世利太翁然醉鄉之外更何有一條只餘山水緣
天一下山山水無不遊青牛白鹿見羣仙一日暮長風吹巾幘
竹飄々兄石室共無恙行李蕭然殊俗一擣
幾處騎愁對渠酌我是十年舊相知旗亭重遇
千山萬水相携歸淺浦春風四柳色半瓢酒遇馬竹與石
愧無玉一璧照瑤席上贈以本溪石數奉山人愛石
謝云從此去開左安石排竹築園宅笑指芙蓉跨
別後風流可得聞他時對石若相憶彷彿七十二峰雲
卿ハケ枝引ひてあひ川の上流へり漢翁搜経にて
天すれ予地川ひて一縦れ道を通次

卷之三

—

東北流ひがし上流じょうりゅうよりて關村せきむらを過くわ
其人かのひと此こゝアリてトロの眺ながめとつ
南みなみ新川しんかわは源名げんめい之内うちれよ峰ほうより而ひ數すう一
聖川せいかわ等とう東ひがしより來くわアリる聖川せいかわ市いち川かわの二流りゆう小こより而ひ來くわ
足流水あしりゅうすい此こ小溪こうけい合あひて流りゅうとなり而ひ數すうと穿うがちて而ひ奔はしも
其獨ひとり奇き秀ひで靈れい麗れいれやくなれべつ也まとつて澄すみ涇けい都望むほ
競たがあれば更また奇き觀くわんとつべ

○ 塚 あかねの山の名前

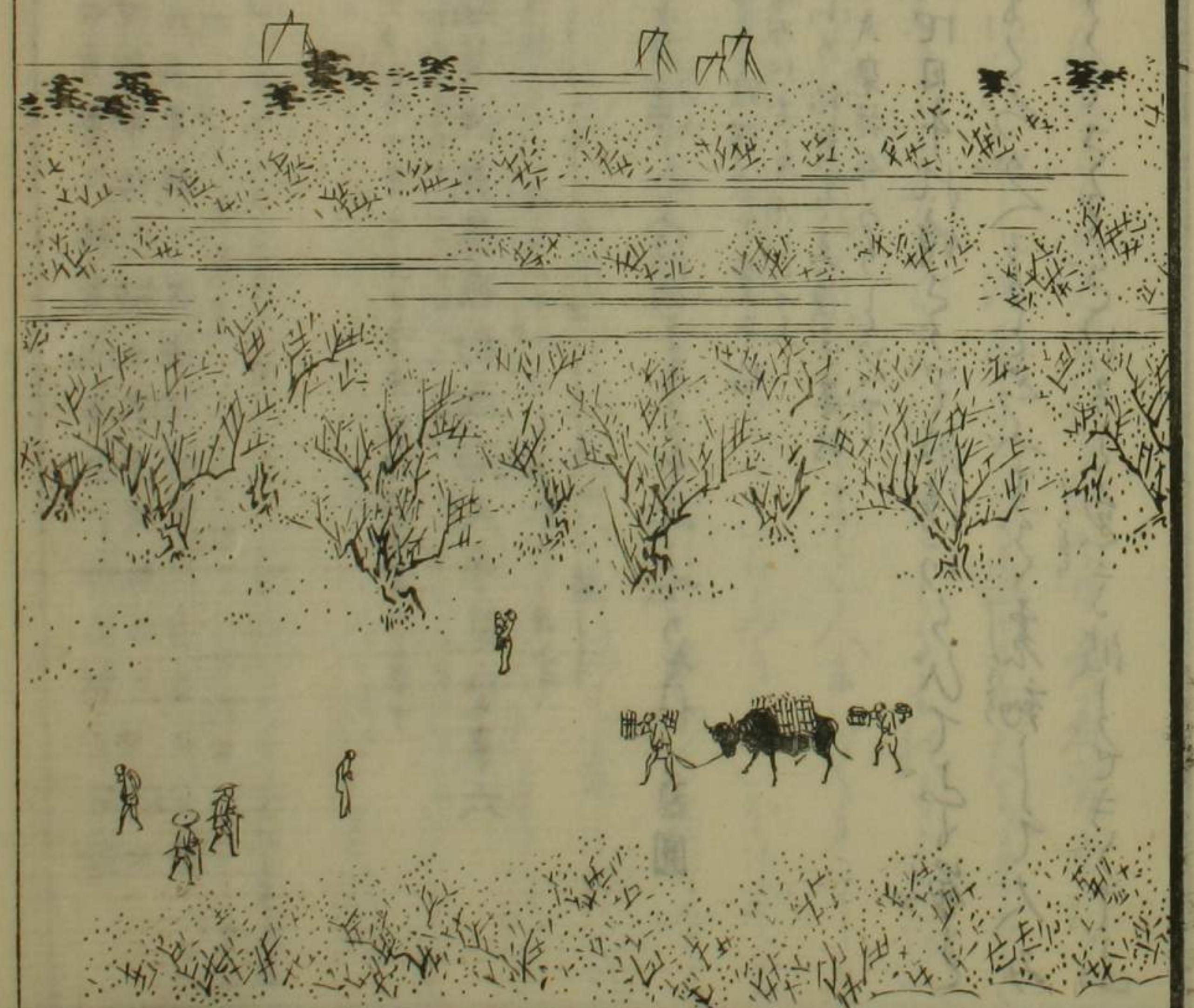
和惣太神社旧村之内の紀神社也。次執事の者
小兒の後御子あれから御子れを献げ
寶殿神社すゑ村子らとみう村の產去神なり。文禄四年所造れ。
社株れく天官比神と申れとつて。神名化え入行くら歟
名之内村の小れと峰あて南面年奉秋津元子駕に田辺より
伊作田伊作田近くあり。それより以降とてあると純作殿殿名とし
埴田梅林往きれん古及一村とくく梅林にて。系候る。
萬株梅花歌又宿南部覩梅野呂隆訓
朝振衣浴蘭蓀猶侵混濁塵世煩誰識羅浮
永抱清香睡黃昏我亦曾摘瓊英去再宿梅莊
夜冷獨捲皓霞卧自是幽夢屬永覓春風偷々
又踏橫斜月明痕十里矚雲人不見縹緲寒聲
簫聲不下飛天外洞霄只看鶯影翻羣真遙參

松雪遺稿

遺稿
萬株梅花歌 又宿南都觀梅
野呂隆訓
朝振衣浴蘭蓀猶侵混沌
永抱清香睡黃昏我亦曾摘瓊英去再宿梅花萬樹
夜冷獨捲皓霞卧自是幽夢屬永霓春風偷吹吟筠
又踏橫斜月明痕十里璫雲人不見縹緲寒馨薰乾坤
簫聲不下飛天外洞霄只看鴛影翻羣真遙舉素霓袂

中
古
文
獻

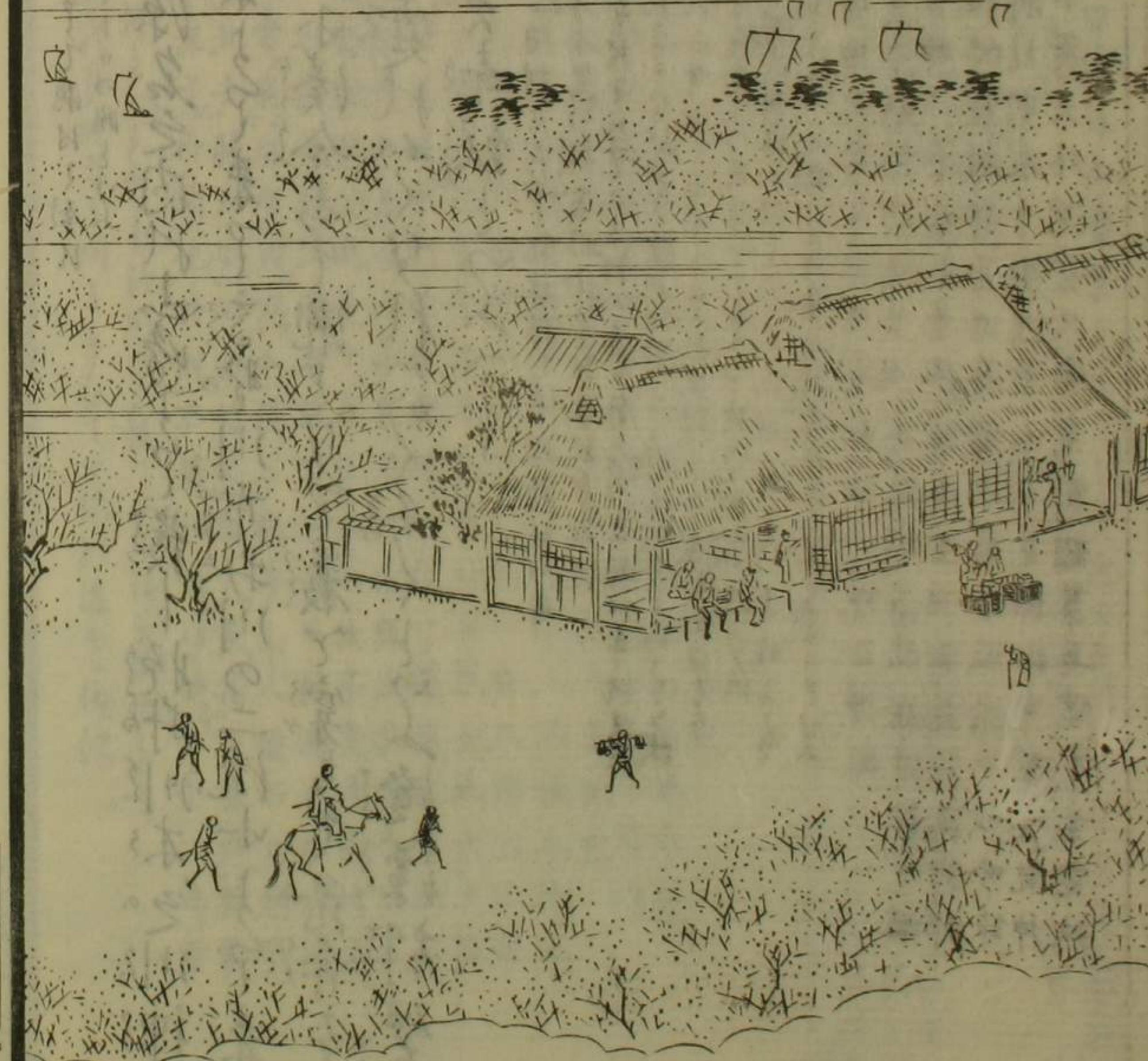
浦ちく
埴田の
うらぢく



水梅田植

西田三子齋

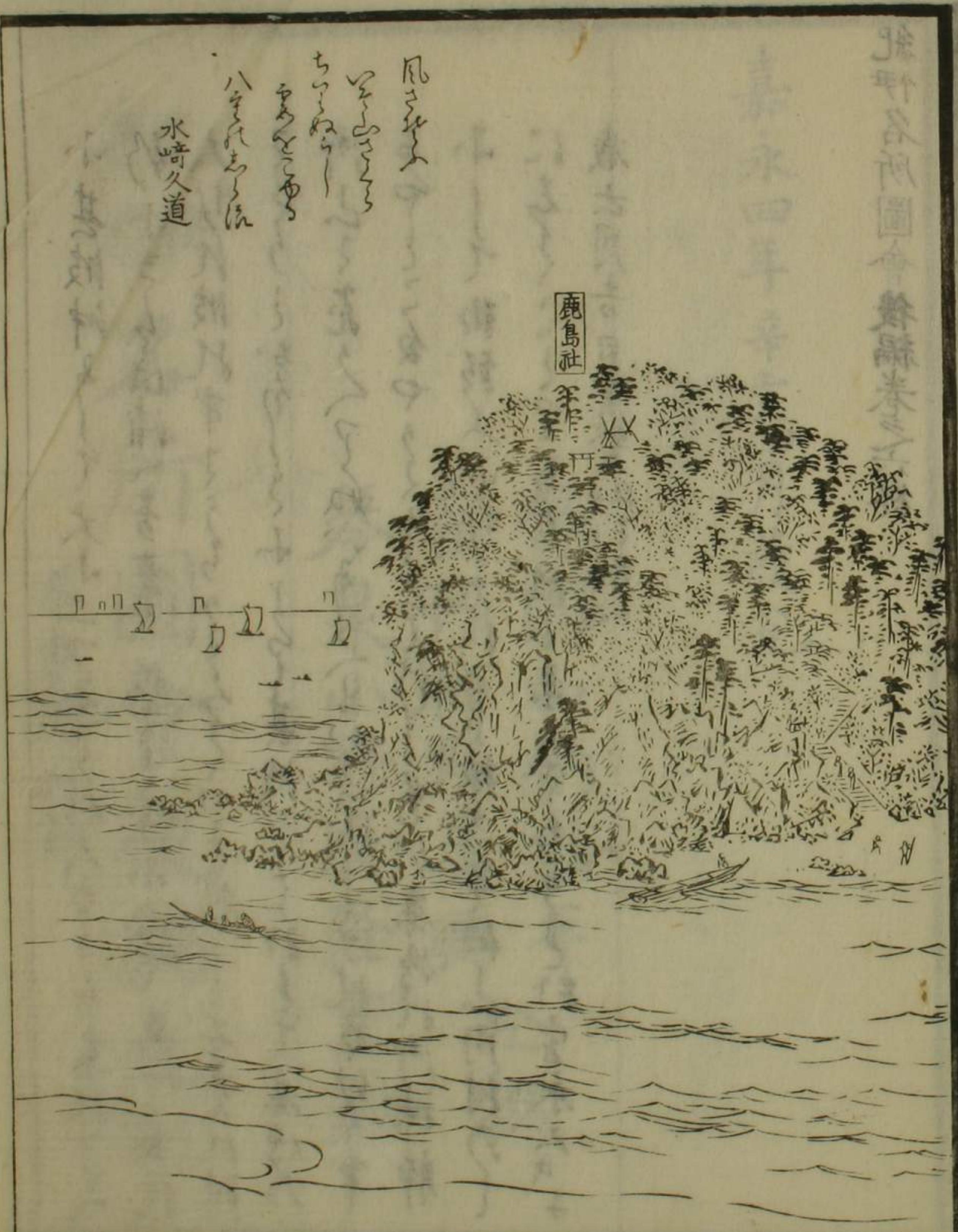
うひき
されある
のうも
ありふきて
とか田の
れりきり



南部鹿鳴神社



熊代繁里



小其波冲よりて大小二つ小それ大よりと東北之
乃小きもとば浦へ寄あり彼より下小高て先一毛れ
大それ波れゆくうちくみくみつと仍一う芳岸れ沖
くみくみとちりくみふよしと其波をもむきて麻傍乃
浦より荒くアヌ、アヌ（もか）モ一タリけける事
少やとこ魚やくまくまく作（見）御麻傍れ浦神輿
小一て御船（おひふね）小りれ一板（いた）彼山内村乃
にあくこと里ある波も未らざりタリ（下）宝永又氏子
歳六月吉日重賢キタケン

紀伊名所圖會後編卷之六終

嘉永四年辛亥四月發兌

柿園加納諸平

雀死神野易興

全撰

琴泉小野廣隆畫圖

紀伊名所圖會後編近刻

牟婁郡之部

北發行書林

江戸 須原屋茂兵衛
大坂 河内屋喜兵衛

同 河内屋太助

紀伊書肆

帶屋伊兵衛梓

平井五梓堂藏版書目

物理階梯

全三冊

君山著
漢畫獨贊古

全二冊

萬國通史

全九冊

赤城先生音訓
大原東野編輯
名數畫譜

全四冊

萬國通史字引

全一冊

赤城先生音訓
大原東野編輯
四書正文

全十冊

小學博物圖說

全四冊

岡沢徹編輯
皇國地理要略

地圖附
全三冊

互通用文章

全一冊

文部省翻刻
日本地誌略

全三冊

和歌山本町或丁目

書林

平井文助

